
流れない涙

雨宮羽音

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

流れない涙

【コード】

N0013D

【作者名】

雨宮羽音

【あらすじ】

うちき主人公、十夜は、ある日、隣に知らない女の子、夕奈が引越してきた。しかし、夕奈は二重人格で、もう一つの人格は殺し屋らしい。

第1話（前書き）

はじめまして、あまみや はねと雨宮羽音と申します。この小説は最近書き上げた小説です。ごく普通の恋愛ものです。すこしらぶえっちシーンがありますので、R15にしました。よろしくお願いします。

流れない涙

第1話

僕は深く眠りについた。

夢を見ている。

僕は夜の大草原に座っている。

周りに誰もいない、何も無い。ここにあったのは、私を迎えるように、軽く揺れているススキしかない。

「ここはどこ？」

と、僕は呟く。

しかし、その話は、誰にも届かない。

「はああ、ベッドに寝ていたはずなのに、なんでここにいるのだろう」

僕は嘆く。

ふと空に顔を仰向けて、今の夜空の景色を堪能する。

「ここが現実の世界だったらしいのに」

しばらくすると、僕は頭を左右に振った。

「いけない、大切な人が僕を待っているから、ここにいてはいけない」

僕は気がついた。素敵なこと、ものは長続きしないこと。一番重要なのは、その限られている時間を大切にすること。

きらきらときらめく星の中に、すばやく流れている一つの星が目映っている。

それが間違いなく、流れ星だ。

僕は目を閉じて、プリストが祈祷してうるように祈る。

「どうか、元の世界に戻れますように」

「うふふ」

慣れない声が、耳にした。

見たことのない女性は私に向いて、話し始めた。

「あ、あなたは誰？」

「今はあなたに教えることができないのです。ただ、あなたに伝えたいことがありますから、ここにきました」

「笑いたい時に笑う、泣きたい時に泣く、それは、私たち生まれてから分かる常識……」

「それは当たり前のことだ」

わけの分からないことを聞いて、僕はぽかんとしている。

「ただ、さまざまの感情の中に、もし、一つの感情が奪われて、これからも表せなくなったとすれば、あなたはどうします？」

「一体何を伝えたいのか？ さっぱり分からない。」

「では、私はそろそろ行きますから。さようなら……」

「ちよつと、待って……」

突然、夜空から、光が現れ、やがて柱になり、僕を照らした。

「なんだよ、この光は」

僕は思わず手でかざす。

でも、その光がだんだん広まって、僕を包み込んだ。

「うわああああ……」

目を開けると、僕がベッドにいた。お母さんが部屋のカーテンを明けたせいで、光がそれを通して、目が痛くなった。

「眩しいよ、お母さん」

「十夜ちゃん、いつまで寝てるの？ 早く起きなさい、そうしないと、また遅刻するよ」

お母さんが仁王立ちして、僕を促した。

「お〜か〜あさん、今日は日曜日だったのに……」

「あら、ごめんごめん、忘れちゃった…… えへ」

お母さんは子供のように笑って、スルーした。

「じゃ、もうちよつと寝かせて」

僕はお母さんにせがむように言う。

「まあ、今日は学校ないから、特別にしてあげる」

「特別か……僕は心の中に苦笑いした。」

「あんまり寝すぎると、体がだるくなるよ」

その言葉だけを残して、お母さんは部屋から出た。

……

「うああああ」

僕は欠伸をかみ殺せなくて、そのまま出た。

ちよつとベッドの隣に置いてある目覚まし時計を見ると……

「ええええ、もう三時過ぎだ」

一体どれくらい寝たんだろう、僕さえ分からない……

お母さんが言ったことが当たった。

「あら、もう起きたか？ おやつを準備してるから、早く支度して」

「はい」

たくさん寝たのに、まだ眠い……

僕はしぶしぶと起き上がった。

顔を洗って、そして、居間へ向かった。

ちよつど、お母さんが焼きたてのトーストを持ってきた。

こんがりと焼けたトーストの香りが漂って、食欲をそそる。

「いいタイミングだね、さあ、冷めないうちにいっぱい食べてね」

「ジャムはここにあるから、つけて食べてね」

「うん」

「おいしい……」

あつという間に、トーストは全部平らげちゃった。

「そんなにお腹がすいてるの？ 十夜ちゃんもずいぶん育ちざかりだね」

「……」

「ねえ、お母さん」

「なに？」

「僕、変な夢を見た……」

「何の夢？」

「夢の中に、知らない女の子が僕に、変なことばかり言って、一つの感情が奪われたらどうするのかって、全然分からない……でも、僕、すつごく不安だ、もし、その話が本当だったら……」

僕は戸惑いながら、お母さんに昨日で見た夢の話語った。

「心配しないで、十夜ちゃん。あなたはいいい子だから、絶対誰から何も奪われたりしない。私が十夜ちゃんを守るから」

「お母さん……」

お母さんはそつとして、僕の頭を撫でる。それが、僕だけの、お母さんの温もりだった。物心がつく前に、お母さんとお父さんがもう離婚した僕にとっての大切な人は、お母さんしかない。

お母さんは仕事しながら、手塩にかけて僕を育て続けている。それは決して簡単なことではない、と僕が分かっている。だから、僕はあまりお母さんにあれこれを要求しない、おもちゃとか、綺麗な服とか。ただ、お母さんと安らかに過ごせるだけで満足だ、それ以上は願わない。

学校でも友達と仲良く過ごしていて、喧嘩もあまりなく。なかなか楽しい生活を送っていた。お母さんでもできるだけ僕の要求を満足して、私が悲しまないように育てている。

それで、僕はいつも一つの感情が欠けているよう気がする。それが長続きしないと分かってながらも……

「さてさて、今日はどこも行かないで、家にゆっくりとくつろぎなさい」

「うん」

……

流れない涙

夕方になって、お母さんは晩ご飯の仕度を始めている。

「今日の晩ご飯、何にしたい？」

「えっと、ハンバーグはどうかかな？」

僕は思わず答えた。何故なら僕はお母さんが作ったハンバーグが大好きだから。

「ハンバーグか？ よし、そうしよう」

「あら、十夜ちゃん、ちょっとハンバーグのソースが足りないけど、近くのスーパーに行つて、買つてきてくれない？」

「うん」

僕はすばやく出かける。

「十夜ちゃん、お金まだ受け取つてないよ」

ちょうどそのときに、知らない女の子とばつたり会つた。

ゆっくりと沈んでいる太陽の茜色に染まるように見える髪は、風の動きにそつて、そつと揺れている。青色の瞳は、遙かなところを見ているように見える。すべすべとした肌は、まるでマシユマロのようだ。ひらりとしたワンピースはパラソルに見える。

少女はすこし髪をいじつて、なびかせる。

「ふふっ」

少女が私に挨拶したがるように、微笑んでいる。

「あっ……」

僕はぎくしゃくとした。

見たことの無い少女が僕の目に写る。確かに、隣はおばさん一人しか住んでないのに、おばさんの友達なのかな？ もしかして、おばさんの私生児？ そんなハレンチなことを……ああもう、僕は何を考えている？

なにより、ソースを買つてくるのが優先事項だ。

僕はそのまま女の子を無視して、隣のスーパーに向かう。

「いらつしゃいませ」

店員はいつもの営業スマイルで僕に挨拶した。

「ソ、ソースをください」

「ソースですね、こちらになります」

「ありがとうございます」

目の前には、いろいろなタイプなソースが置いてある。僕はどっちにしようか悩んでいる。よし、適当にしよう。

僕はソースを持って、レジに向かう。

「ありがとうございます、280円になります」

「はい、えっと、あれ？」

「どうしたんだい？ 少年」

「財布忘れちゃった……」

「こりゃ、それじゃだめだろう、お金ないと、商品を買えないぞ」

「すみません、お金を持ってくる」

さつき出かける時、忘れてに間違いない……仕方ない、もう一度家に戻って、お金を取るしかない。

家について、廊下から家まで歩いている途中、またその子と出会った。もしかして、ずっと僕のことを待っているのか？ いや、見たことのない女の子は、絶対私のことを待っているなんてありえないから……

「君は、さつきの……」

「……」

少女は黙々としている。

「さつきはすみませんでした」

「……」

少女はあいかわらず、何も話さない。このままじゃ話が進まない……

「隣の203号室に住んでいる十夜です、よろしく。」

「えっと……」

少女はスカートの裾を掴んで、すこし身体を低くしている。

「今日引越したばかりの夕奈です。この町についたばかりですから、いろいろわからないところがあります。よ、よろしくお願いします」

夕奈は顔を傾けて、顔が紅潮した。なんだかその初々しい姿がかわいいと思える。

「これから買い物に行くから、一緒に行く?」

「うん」

夕奈は頷いた。

「ちよっとお金を受け取りに行くから、ここで待って」

「分かりました」

僕は急いで家に戻って、お母さんのところへ行く。

「おかえり」

「お母さん、すみません、お金を忘れて、買えなかった」

「いいよ、ほら、手を出して」

僕はお母さんからお金を受け取った。

「行ってきます」

と言つて、家から出ようとした時……夕奈がドアの前に立っている。

「夕奈ちゃん、外で待ってって言ったじゃない?」

「やばい、戸締りし忘れてた……このままじゃお母さんにはれてしまう」

「十夜くんが遅いですから……」

「あ、ごめん」

よりによつて、お母さんがこっちに向かってくる。まずい、これじゃ絶対誤解される。

「あら、十夜ちゃん、おめでとう」

「違う……」

「お〜か〜あ〜さん、知り合っただばかりの友達だよ、友達……」

「はい、分かった、分かった、ふふ」

「どうやらすっかり誤解されてしまったようだ。」

「夕奈ちゃん、よかったら、今日の晩ご飯、一緒に食べませんか?」

「い、いいです……」

「恥ずかしがらないでよ、誤解が解かなくなる……」

「ああ、今から悔やんでも後の祭りだ。」

「とりあえず、行ってきます、夕奈ちゃん、早く」

「あつ、はい」

そんな気まずい空気を解けるように、僕たちはすたすたと家から出た。

「待って」

すっかり、夕奈のことを忘れてた……

「今どこへ行きます?」

「うん、スーパーに行つて、ハンバーグのソースをかう、それだけ」

「ハンバーグですか? あたし、大好きです」

「僕も好きだ、特にお母さんが作ってくれたハンバーグは最高だ」
「では、楽しみにしていますね」

淡々とした会話を続けながら、スーパーに着いた。

「さっきの少年じゃない? 彼女まで連れてきたのかい?」

だから違つてば……

「とにかく、お金を持ってきたから……」

わざと話をはぐらかした。

「はい、300円」

「毎度あり」

ソースを買つて、僕たちは家に戻った。

「ただいま」

「おかえり、ソースを買つたよね?」

「はい、これ」

「ごくろうさま、じゃ、今から晩ご飯を作るから、出来上がるまで待ってね」

「は……い」

「はい」と言ったのに、「い」の発音が、お腹からのぐーぐーと鳴っている声が家に響き渡つて、遮つちゃう。

「くすくす」

夕奈は片手で口をかくして笑っている。その微笑みは、まるで天使のようだ。

って、そういう話じゃない。

ああもう、恥ずかしくて仕方がない……

「十夜ちゃんも男だから、もうちょっと我慢できるよね？」

そこまで言われたら、我慢するしかない。

「頑張つてね、くすくす」

お母さんに言われてかまわないけど、夕奈までとは……

はああ、穴を掘って埋まりたくなる……

……

「出来ましたよ」

この15分間ずっとお腹を押さえ続けて、なんとか収まるようだ。そうじゃないと、おそらく晩ご飯が出来上がるまでずっとなり続けるだろう。

「ばんごはん、ばんごはん」

夕奈がうれしそうに歌っている同時に、僕はもう席について待っている。

「いただきます」

そう言ったとたん、僕はもうハンバーグを摘んで、自分の皿に置いた。

よだれが垂れそうに、ハンバーグを口に入れたい直前に、お母さんが突っ込んだ

「ほら、食べる、先に女の子の分にも取ってもらって」

「……」

夕奈は何も言わなかった、ただその場に座って、僕を待っているかのようにぼっとしている。

なんだよ、自分で取れるのに、なんで僕夕奈にハンバーグを取ってもらわなければならない？

しかたなく、僕は箸でもう一枚のハンバーグを摘んで、夕奈の皿に置いた。

「あ、ありがとう」

夕奈はぎこちなく、頷いた。

「さて、あらためて、いただきます」

「いただきます」

……

「ごちそうさまでした」

夕奈が礼儀正しく会釈した。

「いいえ、こちらこそ」

「また遊びに着てくださいね」

お母さんがおじぎで返した。

「おやすみなさい」

僕も適当に挨拶をした。

「今日はいろいろありがとうございました。本当に助かりました。

では、お先に失礼します」

「十夜ちゃん」

「何？ お母さん」

「ちゃんと家まで送ってあげて」

「えええー」

隣の家に住んでいるのに……そこまでしなくても

「だめよ、十夜ちゃん、ちゃんと女の子を目的地まで送り届けない

と」

「はい、分かった」

「くすくす」

僕はしぶしぶとして、夕奈と一緒に出た。

「今日はいろいろありがとう」

「い、いいえ、こちらこそ……」

「そういえば、お母さんはおもっしろいですね……」

「そうか……あはは……」

何を答えたらいいのか分からなくて、適当に笑って話をそらした。だめだ。周囲の雰囲気重くなってきた。何か話さないと……

「あのう」

「あのう」

僕と夕奈が一緒に話した。

「えっと、そっちは女の子だから、さきにどうぞ」

「いいえ、十夜くんが先に言い出したから、おさきにどうぞ」

なんだろう、雰囲気さがさらに重くなった……

僕がこの重たい雰囲気を打破しようとした。

「これからどう呼べばいい？ 夕奈ちゃんが恥ずかしいと思ったら

……」

「いいえ、恥ずかしくもなんともないです、このまま続けてそう呼ばれてもいいです」

「んじゃ、これからも夕奈ちゃんって呼ぶことにする」

「では、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

まず、一件落着。とりあえず、家に帰ろうか……

「ねえ、十夜ちゃん、あの子をどう思う？」

「????」

僕はしらばくれる。だが、顔を赤らめて、すぐバレバレになった。

「ほら、照れてる」

「照れてないよ、もうお母さん、からかわないでよ」

「他の誰にもいないのに、十夜ちゃん、素直じゃないの」

「……」

僕は何も答えられなかった。

「もう寝る、おやすみ」

「……」

あえてお母さんと口喧嘩するより、僕はその場から離れることにした。

いろいろと疲れたから、僕はパタンとベッドについた。でもなかなか眠れない。一日中で起こったことがずっと思っていて、身体がろくに休めない。

僕はベッドの中でゴロゴロして、いつ眠ったかはもう自分さえも知らなかった。

翌日、僕はいつも通りに、朝早く起きた。早起きは三文の得ではなく、学校に行かなければならないことだ……

「おはよう、お母さん」

「おはよう、十夜ちゃん、今日も早いわね……朝ごはんの用意は出来たから」

「はい」

僕は洗面所に向かって、顔を洗った。

居間へ向かうと、お母さんはもう座って僕を待っている。

「それでは、せーの」

「いっただきま〜す」

僕たちはハイテンションで叫んだ後、朝ごはんを食べ始める。

テーブルにおいてあるのは、ソーセージ1本と目玉焼き2個……

あれ？ 揃ってない

いや待て、これをどう見てもおかしいだろう……

ソーセージが1本、目玉焼きが2個。何をほのめかしているのだろう。

なんだよ、この朝ごはんは……

その隣に、ミルクもある。もしかして、これも他の意味が潜んでいるのだろうか？

僕はちよつと目線がお母さんに移る。

「お母さん」

「何？」

「どうして目玉焼きは2個もあるのに、ソーセージは一つしかない？」

「それはね、仕様ですわ」

「……」

仕様って……

からかわれたような気がする。

「テストで満点を取って欲しいから、こういうふうについたの」

僕がテストで満点を取って欲しいということなのかわからないけど、まずそれは無理。とにかく、気持ちだけ受け取っておくとしてよ
う……

「むっ」

僕はわざと怒っているように、お母さんを睨んでみる。

「あらら、それは嘘だ、ちょうどソーセイジが一つしかないからね、あは、あはは……」

「じゃ、ミルクは？　今までミルクを買ったことないのに……」

「それはね、十夜ちゃんが元気に育てるために買ったの」

お母さんはそう言ったけど、確かに僕の胸を見て話してくれている……

男って、胸の大きさはどうでもいいだろうに。

「かあさん！」

「はい、冗談はここで終わり〜」

「……」

そんなお茶目な性格をやめてください、もう子供じゃあるまいし……

「十夜ちゃんが小さい頃から小柄だから、ミルクを飲ませて、もっともっと　背が伸びるかなあと思って、ミルクを買っただけだ、別に他の意味はないから、お母さんのこと、怒らないで……」

お母さんが泣きそうな顔で僕を見つめている。

「僕は、怒ってないよ、お母さんはお母さんだから……」

だから、かわいがってあげるとからかうは違うだろ？　いつも僕をからかってばっかりいるけど、決して嫌いわげじゃない。でも、なぜいつも僕をからかうか分からない。

僕のことを好きだからこそからかってくる？　それとも……
気遣って欲しいからこそからかってくる？

確かに、僕は学校に行ったら、家はお母さんしかいない。昼ドラ

マでも、隣同士とのムダ話でも、いずれ飽きるだろう。

お母さんは気を取り直すため、ちよつと洗面所行って来た。

「さあさあ、早く朝ごはん食べなさい、そうじゃないと、学校間に合わないよ」

「うん」

しばらくすると、朝ごはんを食べて、ミルクも飲み干したあと、僕はバッグを持って、学校への準備をする。

「まあ、とにかく、朝ごはん食べ終わってたから、学校行ってくる…」

「行ってらっしゃい、気をつけてね」

お互いに手を振りながら、僕は家を出て行った。その時……

夕奈とばったり会った。

「夕奈ちゃんじゃない？ おはよう」

「おはようございます」

今日はワンピースじゃなくて、普段着を着ている。さわやかな気分を感じられる。頭に2つのリボンをつけている。そんな夕奈でも可愛いと思われる。

夕奈は引越したばかりだから、学校は行かなくて済んだってこと。

多分今日は一人であちこち回るだろう。

「十夜くん、朝早いですね、これからどこへ行きますか？」

「学校だよ、僕は一応学生だから……」

「いいなあ、学校、あたしも学校行きたいです」

「この町に住み着いたら一緒に行こう」

「うん」

「もうそろそろ時間だから、さきに行ってくる、またね」

「あたしはちよつとこの辺を見て回るから、じゃね」

軽く挨拶したら、学校へと向かった。

いつか夕奈と一緒に学校に行ける日を期待している。

キーコンカーコン……

「ぜえぜえ、間に合った……」

「おまえ、いつも早いのに、今日はめずらしいじゃねえか？」

僕に話しかけてくるのは、僕のクラスメイトである、浩平だ。

「今日はいろいろ事情があったから」

「もしかして……ちくしょう」

浩平の態度ががらりと変わる。

「おい、いきなりなんだよ、おまえ」

「俺を待たずに、先走って彼女が出来たとは、許せない……」

態度が豹変した浩平は、僕を見て怒鳴ってみせる。

普段他の生徒と話している生徒も少し視線が集まってきた、こりやまずい。

「おい、ちょっと……僕は何も言ってないから、勝手に勘違いしないで」

「じゃ、おまえが無罪だと証明してくれ」

浩平が開き直った。突然証明してくれって言われてもしょうがない……そもそも彼女がいないのに、それに、夕奈は知り合ったばかりの友達だけだ。無理やり濡れ衣を着せるなんて、今日はいやな予感がする……

「何をすればいい？」

「ここでじっとしてろ、動くな！」

もはや喧嘩沙汰になったので、他の学生の視線もこっちに注目してくる。

浩平が急に顔が寄ってくる。

「おい、何してる？ 僕はガチホモじゃない……」

「うん、こっちは異常なし、次」

とても小さな声で言ってるけど、僕がはつきり聞き取れる。

「お、おい、ちょっと待て、そこ、そこは……」

このバカ、一体何をチエックしたいんだらう、早く終わらせてくれ、それとも、誰か助けてくれ……

浩平がまた近づいてくる。

でも、今回はちよっと髪の方に寄る。

「うっん」

僕の髪に何がついている？

「うっん」

浩平はさらに、僕の頭を嗅ぐ。

「うっん」

「あれ？ 二人ともここに何してる？ とくにあんた、他人の頭を嗅ぐのはやめなさいよ、ヘンタイか？」

委員長だ。僕の助け舟にしてくれ。もう我慢できない。

それでも、浩平はまったく委員長の言葉を無視して、さらに手を出して、僕の頭を探ろうとする。

「いいかげんに……」

「あつた！」

「!？」

僕の頭に、何があつた？

「頭皮だ!!!」

「おまえアホだろ？ いきなり大声で出すな！」

確かに、昨日はシャワーをせずにそのままベッドについたせいで、頭皮があつても無理は無い。それにしてもおっぴらに言わないで欲しい。

だが、あいつがずけずけと言っちゃった……

「あはは、きたない」

笑い声がちらほらと聞こえてくる。

クラス全員に笑わないだけでよかった、むしろ笑ってない人も頭皮があつたのかな、と僕は疑っている。それはどうでもいい。

「おまえら、さつきから騒がしいぞ、外にいても聞こえる、早く席に着け」

僕たちはすかさず席に戻る。

「起立」

流れない涙

「礼」

「着席」

委員長って大変だな、毎日何回もその話を言わないといけない。
僕のため息をつくと同時に、授業が始まった。

第2話

午前中の授業が終わる前の5分。

クラスの皆は待ちかねている、そつだ、食堂だ。

食堂という神聖な場所は、昼ともなると、必ず戦場となる。飢え死に間際の人にとって、この戦闘に負けると、午後の授業はかならず倒れるに間違いない。

なので、その人たちは勿論他人より一步早く戦場へたどり着けるために準備しておく。勝ち抜けた人は、美味しい昼ごはんを堪能できる反面、遅れて行く人は、皆が欲しくないものしか買えなくなる。さらに一番まずいパンまで売り切ってしまう可能性もある。

それが、僕が通っている学校のある残酷な現実だ。

だから、クラスの人にはチャイムが鳴る瞬間を狙って、一気に食堂を走ろうとした。

キーコン〜カーコン

「きりっ」

「あつ、おい、ちょっと、授業はまだ終わってないぞ……………」

挨拶を無視して、そのまま食堂へ走ろうとする人は僕だけじゃない、浩平と他三名だ。

この挨拶を無視しただけで、先頭の列に並べる。

「やれやれ、毎日もそうだから、もう慣れた……………」

「先生……………」

委員長は無言のまま、先生を見ている。

一方、僕たちが他のクラスの皆に負けないで、ひたすら食堂へ走り続けている。

かえって、弁当を持ってきた生徒は、各自に弁当を取り出して、机を囲んで楽しく昼ごはんを食べる。

「今日は絶対やきそばパンを手に入れる！」

「それはこつちの台詞だ！」

「させるもんか」

同じクラスで抜け出した学生も負けないうで叫んだ。

やっと階段が見える、この階段から降りると、食堂がすぐ側にある。よし、負けないうで。

降りる前に、階段の隣にあるクラスのドアが急に開いて、誰かバナナの皮を投げてすぐ閉めた。

「うわっ、何これ？ 十夜ジャンプ」

僕がバナナの皮を気づいて、それを踏む前に飛び跳ねてみごとに避けた。

「なんでいきなり飛び跳ねてる？ おまえ」

「うわあああ」

僕の視線に遮られて、地面を見えないせいで、浩平がバナナの皮を気にせずにそのまま踏んじやった……

そして、かきれいに滑った。

しかし、浩平の後ろに走った他の三人は、助けもしないで、そのまま階段へと向かった。

理由は言うまでもない。

結局、浩平が自ら立ち上がって、ようやく食堂に着いたが……

やきそばパン売り切れた……

「……………」

残っていたのは、コッペパンしかない。

「ちくしょう、誰がこんないたずらをしやがって」

自分の無力さに対して、一人で呟いている浩平を不憫に思う……でも、僕はあいつを見捨てていない、前列に割り込んで、やきそばパン二個も買えた僕は、へこんでいる浩平に向かって、救いの手を差し伸べた。

「ほら、おまえの分だ、遠慮なく食べて」

「あ、ありがとう、おまえはサイコーだ！」

「まあ、大したことないけど……………」

突然浩平が僕をギュッと抱きしめられて、何もできなかった。

「ありがとのおお、漢の友情に万歳」
「やめる、恥ずかしいって」
他愛のない話を続きながら、僕たちはその戦利品を食べた。

……

「起立、礼、さようなら」

委員長の号令とともに、今日の授業が終わった。

「やっと終わった、さてと、今日はゲーセン行く？」

浩平が誘ってくる。ゲームを楽しむより、女の子をナンパすることが目的だと分かっている。

「悪いけど、今日は行きたくない……」

僕はあっさりと拒絶した。

「なんだよ？ 行かないのか？ キレイな女の子がいっぱいいるのに」

「なんでそう思っている？ 女の子なら、学校でもいっぱいいるけど」

僕は反論した。

「オトコの直感だ、ぜったい間違いない！」

意地を張って言うてくる。

たまには、ゲーセンに言って気晴らしにしても悪くないから、僕は浩平と一緒にゲーセンに行くことにした。

「ん」

遠くから、女の子声が聞こえる。

「んんんんん」

その声は次第に大きくなる。

「うううううううん」

女の子は地団駄を踏む。

どこかで聞いたことのある声……

「はあ、これで10回かな、なかなか取れない……ああもう」
「どうやら10回でもつき込んだようだ。」

ぱっと見だけで、その人が夕奈だと分かった。しかし、声をかけようか、かけまいか迷っている。

声をかけたら、絶対あいつに誤解される。

でも、声をかけなかったら、なんだか悪い気がする……

「おまえ、何を考えてる？」

「なっ、なんでもない……」

やっぱり声をかけよう、夕奈がかわいそうだし、どうせ隣に住んでいるお隣同士だから、あいつが理解してくれるだろう……

「よう、こんにちは」

「あれ？ あっ、こんにちは、十夜くん、こんなところに会えるなんて、奇遇ですね」

「と、十夜くんって呼んだぞ、おまえはやっぱり……くっ、くやじ
いいいい」

浩平はいつの間にか悲鳴を上げる。

悪寒がする、そろそろ説明しないと。

「ちよつと紹介する、この人は僕の隣に引っ越したばかりの夕奈、
そして、こいつは僕の友達、浩平」

「他人のことを紹介するときはこいつって言うなっつーの！ チキ
シヨウ」

「こんにちはは、はじめまして、夕奈といいます。よろしくおねがい
します」

ワンピースと違って、裾はないから掴めない。普段着でありながら
も、ちゃんと身体を低くして挨拶をする。

「あっ、どうも、こ、こ、浩平です、よろしく」

かなり緊張した様子。そもそもゲーセンに行つて、ナンパしよう
したいのに、おまえはガチガチに緊張してどうするんだ……

「十夜くんはここで何をしますか？」

「たまには友達と一緒にゲーセンに行こうかなと思って、ここに来たけど、夕奈ちゃんも町を見て回ってるじゃない？」

「うん、確かにそうですね、ゲームセンターに通りがかって、ちよつとしてみたいから、しばらくここにいました。あたし、ゲームセンターに行ったことありませんから」

「ゲーセンも行ったことないのか？ 一体昔夕奈はどこに住んでいるのだろう……」

浩平も側にいるから、聞かない方がいい……

「そして、この大きな機械の中のぬいぐるみが欲しいから、すこしして見たけど、もう十回も失敗しました、しくしく」

「どれどれ？ 僕もやらせてみる？」

夕奈が指で指している機械のなかに、いっぱいぬいぐるみが入っている、どれが欲しいかわからない。

「どのぬいぐるみがほしい？」

「えっと、そのウサギが欲しいです」

UFOキャッチャーに入っているウサギのサイズは大きいでもなく、小さいでもなく、夕奈の両手で抱きしめられるぐらいのサイズだ。運がよければ、あまりお金をかからずに取れると思う。

「1発目はちよつとキャッチャーをテストする、どこまで届けるか、クレーンの力をどこまで入るか……それを把握しないと、かなり取りにくい。」

ちよつとウサギの腰の部分を狙って見ると、クレーンがちゃんと締まってないせいで、取り上げることなく、そのままクレーンが戻った。

これで100円……

次、2発目。

今回はちよつと暴力的に、片方のアームを頭に、もう片方のアームを下半身に止める。そして、「押す」のボタンを押した。

クレーンが徐々に落下した、しかし、片方のアームが頭に届いているけど、もう片方のアームは何も掴めないまま戻った……

「この方法もダメか……」

夕奈ははらはらとしながら僕を見ている。

なかなか簡単じゃない…… UFO キャッチャーっていうものは……
10秒もなく、100円玉が次から次へとそのまま水の中に沈む
となる。

次、3発目。

今回は縦も横も狙わないで、斜^{はず}から狙うことにした。

「押す」のボタンを押して、クレーンが落下した。しかし、今回はちゃんとウサギを掴んだ。

「そうだ、この調子で行け！」

取り上げたウサギが、ゆっくりもとの位置に戻っていく、そしてウサギが落下した。

「おめでとう」のような音楽が流れるとともに、僕はそのウサギを取って、夕奈に渡した。

「すげえ、たかが300円で景品を取れるって……俺なら無理かもしれん」

浩平が嘆いたまま、僕を見つめている。

「はい、これを上げる……」

僕はウサギを取って、夕奈に渡す。

「本当ですか？ ありがとうございます」

「えっと、えっと」

夕奈がコインケースを取り出して、何かを探しているようだ。

「はい、300円です」

「?????」

僕はわけが分からずにきょとんとしている。

「さつき十夜くんが使った分です、それを返します」

「別に返さなくてもいいけど……」

上げるまで言って、僕はしかたなく夕奈の手から300円をもらった。

「ありがとうございます、大切にします」

「俺にも教えてくれない？ UFOキャッチャーのコツを」

そんな浩平は阿諛追従ぶりに見える。そのコツを使ってナンパしたいならほかをあたってくれ。

「なんでおまえに教えてないといけない？」

「ちえっ、けち」

「くすくす」

浩平の文句を聞かされる上に、夕奈が笑ってくる。

「もういいから、二人ともからかわないで」

「とにかく、一緒に帰りましょうか？」

「うん」

僕たちはゲーセンから出た。

たわいのない話をしながら、帰路に着く。

「次の交差点で俺は右へ曲がるから」

「僕たちは左だ」

つまり、別れの時間だ。

「今日はいろいろ楽しかったです。ありがとうございました」

「いいえ、こちらこそ、また会おう」

何もしてないくせに……

「またね」

あつという間に、僕たちは家についた。

「ぬいぐるみ、ありがとうございました」

「いえいえ、別に大したことないから……」

「あたしはそう思いません。これが、これが、十夜くんからのプレゼントですから……」

夕奈は恥ずかしそうに顔を赤らめて言う。

そう言われると、むしろこっちの方が恥ずかしい……

「あのう、ずっと聞きたいことがあるんだけど」

「何を聞きたいですか？」

「今日ゲーセンにいたとき、夕奈ちゃんはゲーセンに行ったことな
いって言ったけど、夕奈ちゃんは一体どこから来た？」

「……」

あまりにも唐突すぎて、夕奈がすぐ答えられなくて、ぼおっとしているままだった。

「うん、あたしは、田舎に生まれて育てられました」

「なるほど、早く言うてくれれば良かったのに……別に恥ずかしいことはないと思うけど」

「田舎で生まれ育った子は、それなりの悩みを抱えているから。同じく、都市で生まれ育った子も、それなりの悩みを抱えているからだから、それぐらいのことを気にしなくてもいいよ」

「でも、あたしはたくさんのも知らないのです。ゲームセンターまで行ったことありませんし……」

「それを気にすることはない」

「分かりました、ありがとうございます」

人間は、限られた時間の中に、すべての知識を頭に入ることができない。自分にとって、役に立てる知識を選んで、覚えて、身につけることこそ、一番大事なことだ。

「ところでさ、夕奈」

「はい、何？」

「田舎に住んでるって言ったのに、なぜ上京した？」

好奇心は猫を殺すと分かっているけど、僕は思わず聞いてしまう。

「えっと、私は人を探しています、大切な人を、探しています」

「大切な人か？ その人はどこにいる？」

「あたしもはつきりわかりません……しばらく、あたしのおばさんの家に住んでいますから」

それにしても、分かってないのに一人で上京するのか？ そんな夕奈の勇気に感心する。

「ただ、その人がなんかずっとあたしの隣にいるような気がします」

「でも、その……とは……と……や……ない……し」

最後の言葉が、声が小さすぎて、あまり聞き取れなかった。

「夕奈ちゃん、最後に何を言った？ 僕、ちゃんと聞き取れない」

「なんでもない、なんでもない、えへへ」
夕奈が舌をぺろりと出して、ごまかした。
「とにかく、また明日ね、おやすみなさい」
「またね、おやすみ」

僕は自分の家に戻った。

「おかえりなさい」 私の大好きな十夜ちゃん
お母さんが大きな声で叫びながら、僕に抱きつこうとした。
「おっ」

「あわわわっ」

その一瞬間で、僕は際どいところがかわした、あぶねえ……
「かあさん！ そんな気持ち悪い呼び方をやめてくれない？」
「だって、好きだからしかたないもん」

「……」

なんだよ、そんな理由なんか僕を抱きしめたくなるって……
「はいはい、遊ばない、遊ばない」

「僕をおもちゃとして遊んでいるのがお母さんじゃない？」

「ごめんね」

「しょうがないなあ」

お茶目な性格はいつ直せるだろう。

「晩ご飯の支度をするから、先にシャワーを浴びて待ってね」
「うん」

僕はすたすたと歩いて、脱衣所へ向かう。

上着を脱いで、鏡の前に、生まれたままの自分の姿を見ている。一
体なにをしているのだろう……

僕は胸に手を当てる。それは、ちらちらと青く光っている月型の
首飾りだ。

「一体なんでこのペンダントが光っているのだろう？」
「後でお母さんに聞こう……」

……

シャワーを浴びて、僕はテレビを見ながら、晩ご飯を待っている。

「はい、出来たよ」

「今日はチャーハンだね」

「ごめんね、十夜ちゃん、今日は買い物を忘れちゃったから、それで……」

忘れたらしょうがない。たまにチャーハンを食っても悪くない……
「いいよ、別に謝らなくても……お母さんが作ってくれたら、何でも美味いに決まってる」

僕はお世辞を言う。

「口だけが甘いんだね、十夜ちゃんってば」

また恥ずかしながら言える言葉を口から出ている……

「とにかく、いただきます」

「いただきます」

レタスのさくさくとした感じと、調味料と混ぜ切ったお肉の味は、じんわりと口の中に広がっている。レタスチャーハンうまい……

この世に生きてよかった。

しばらくすると、チャーハンを平らげた。

「ごちそうさまでした」

「おそまつさまでした」

「お母さん、今日はお皿洗いを手伝ってあげる」

「あら、珍しいわね、じゃ、お願いします」

お母さんは手袋を渡して、テレビの前に座って見ている。

「あれ？ お母さん、一緒に洗わないじゃない？」

「手伝ってあげるって言ってるでしょ？ では、全部手伝ってくれよね？」

「……」

アシスタントとしてやりたい俺は、まるでバカみたい。結局、お皿洗いを全部一人でやるハメになった。たまにはお母さんの力になっても悪くないから、よしとするか……

10分後、お皿洗いが終わった。

「お母さん、終わったよ」

「おつかれさまでした」

僕はお母さんのところに行って、一緒にテレビを見て笑っていた。

「面白かった」

「そうだね」

「さてと、寝ようか？」

「うん」

そのあと、僕はすこし今日の授業内容を復習することにした。

午後11時ごろ、ちょっと早いけど。僕たちはこの時間で寝る。

パソコンを持ってないし、出かけることもあまり好きじゃないから、

いつも早く寝ることにする。

お母さんも他の趣味とか持ってないから、いつも僕と同じく夜早く

寝ることにする。

「では、おやすみなさい」

「おやすみ」

……

僕はベッドに寝転がっている。なかなか眠れない。

「うん、あたしは、田舎に生まれて育てられました……」

夕奈の言葉につくづくと考えている。

田舎ものなら、どうしてわざと上京して、人を探すのだろう。しかも、その人はどこかにいることさえ分からないとか言っていた……このままじゃ、見つかる可能性はかなり低いじゃない？

夕奈を助けたい。

夕奈のチカラになりたい。

一体、僕はどうすればいい？

今さら考えてもしかたないので、寝よう……

気がつくくと、もう次の日の朝だった。

カーテンが開けられ、太陽の日差しが浴びている。

その光を耐え切れずに、僕は目を擦る。

「おはよう、十夜ちゃん、朝だよ、起きてください」

「後五分、五分でいいから」

「ダメだよ、起きないと、遅刻するよ」

「じゃ、三分、三分でもいいから」

「それもダメ、もう起きないと、取っておきなメニューを準備してあげる」

取っておきなメニューを聞くと、僕はすぐ起きあがった。それは何だろうか分からないけど、なんだか恐ろしいものに違いないから。

歯を磨いて、顔を洗って、僕は居間へ向かう。

「おはよう、お母さん」

「おはよう、十夜ちゃん」

「おお、今日はパンにミルクだね」

「シンプル・イズ・ビューティー、うふふ」

お母さん分からない言葉を発した。とにかく、朝ごはんを食べよう……

朝は牛乳から、っと……

僕はガラスを持ち上げて、グツと牛乳を飲む……

……

「ごほごほ」

牛乳を飲む瞬間で、僕は吐いた……

「あらあら、十夜ちゃん、きたないね」

僕は挫折したように身体を前に屈める……

騙された、まさか牛乳の中にコシヨウを入れるとは思わなかった。
「あら、ちよつとやりすぎたのかしら？」

「……………」
ほんのちよつとだけのイタズラなのに、でも、僕はすこしでも傷ついた。

お願いだから、もうやめてくれ。

「もういい、学校行くから、じゃ……………」

「……………」

「ゴメン」

お母さんが無力のまま、一人で地面に座って泣いている。

「えぐつ、うわああ」

だが、僕はお母さんを気につけないで、そのまま学校へ行った。

……………

「おはよう」

「なんだよ、おまえ、今日もギリギリじゃねえか？」

「いろいろあつてからさ、遅刻しなくて何よりだ」

「昨日はどう？」

「なにが？」

僕はきよとんとしている。

「他に誰がいる？ もちろん夕奈のことだ」

「僕と夕奈の間に何も起こってないから、勘違いしないで」

「おまえ、テレてる。やつぱり何があつた？」

浩平はさらに問い詰めてくる。

「誰が夕奈だ？」

その声は浩平の声じゃなく、どこかで聞いたことのある声……………

まずい、先生だ……………

「それはえつと、まあ……………」

「あははは」

クラスの中に、また笑い声が絶え間なく起こつた。

はああ、また皆さんに笑われる的となつた……………

「席に着け、そして、静かにしろ」

「起立、礼、着席」

「これからは数学の授業だ、その前、さきに昨日勉強したことを復習するぞ」

「浩平」

「俺？」

先生の指で指しているのは、さっき騒ぎを起こした張本人である浩平だ。

「球体の体積を答えろ」

「……」

どうやらあいつが分からないようだ、あいつに囁きでヒントでもあげよう。

ししし

「そこ！ 声を出すなら今日掃除当番だ」

「……」

先生はすかさず大声で僕を警戒させる。

「ごめん、助けて上げられなかった、一人で頑張れよ……」

「えっと、まあ、あのう、ちょっと」

「あつた、思い出した」

「じゃ、答えてみて……復習だから、間違っても何も怒らないぞ」

先生の言葉が疑わしく見える。

「4 r & amp; sup 2 ; ; ……」

浩平が答えた3秒以内に、先生がチョークを浩平の頭のとっぺんに投げる。

「痛てつ、先生、怒らないって言ったのに」

「でも、チョークを投げないなんか言ってる……」

「はい、次はおまえ」

「……」

こっちまで巻き込まれる。

「同じ問題だ、答えて」

「4 / 3 r & a m p ; s u p 3 ;」
「正解」

よかった、昨日寝る前にちらっと教科書を見た甲斐があった……
「浩平、おまえが今日の掃除当番だ」

「あはは」

またもクラスの皆が笑い出した。もちろん僕は笑わなかった、むしろ笑えなかった。

放課後……

「じゃね」

僕は用事にかこつけて、逃げようとした。

「ちょ、ちょっと、おまえ、俺たちは友達だろ？」

「うん、そうだよ」

「だから、友達を見捨てるわけないだろ？」

「うん、そうだよ」

「じゃ、俺を手伝って、一緒に掃除しな」

「それは無理」

「なんでだよ？」

「罰があたるのはおまえだけだから、僕が手伝う義務はないから」

「チ、チクシヨ……」

あたりまえのことを言ってるから、浩平は反論できなかった。

「とにかく、じゃね」

「……」

浩平を裏切ったようでも後ろめたいけど、ゴメン。

僕は教室を出る。用事っていうのは、夕奈のところに行くに違いない。
い。

校門を出る時、ある人影が見える、その先には、夕奈が立っている。
る。

ずっと僕のことを待っていたらしい。

「こんにちは」

「こんにちは、奇遇ですね」

「夕奈ちゃんはここに何してる？」

「ちょうどここに寄ってきて、十夜くんがこの学校に通っているのではないかなと思って、ここで待ってみました」

「ずばり、僕のことを待ってたのか……」

「とにかく、一緒に帰りましょう」

「うん」

僕たちは帰り道を歩いていく。

「夕奈ちゃん、一つ聞きたいことがあるんだ」

「何を聞きたいですか？ 十夜くん」

「この前、夕奈ちゃんが言ったけど、大切な人を探しているって」

「うん、言いましたよ」

僕はさらに詳しいことを聞く。

「じゃ、その人が、どこにいるかさえわからないのに、どうしてわざわざ上京したのか？」

前も同じ問題を聞いたような気がする。でも、そのとき、夕奈ははっきり答えてくれなかった。

「それは、あたし自身もわかりません……」

「……」

「なんだかその人が東京にいると思っていきますから、つい……」

「女の子の勘、ですよ、えへへ」

「……」

こんなことは直感に頼っちゃだめだよ。

このままじゃいつまで経ってもその人を見つけられないと思う。

僕は何をすればいい？

夕奈のチカラになりたい……

あっ、そうだ。僕も手伝ってあげたら、探す時間が半減できる。

そして、僕はそう言った。

「夕奈ちゃん、よかつたら、僕と一緒に探したらどう思う？ 夕奈ちゃんのチカラになりたい」

「一人で探すより、二人で探す方が早いと思わない？」

「話はそうですけど……」

「どうやら納得がいかないようだ。」

「その人は、一度しか見たことありませんから、顔もよく覚えていません」

「……」

「どこにいるか知らず、顔さえ分からず、どうみても無理としか言えない……」

「あたしが分かっている限り教えてあげますから」

「ああ」

僕はメモ用紙を手にとって、夕奈ちゃんが言うとおりに書き写す。

「その人が、昔に、私がどこかで見かけました」

「あたしが知らない場所、行ったこともない場所で会いました」

「としは大抵あたしと同じく、たぶん十夜くんのような中学生だと思います」

昔、知らない場所い、中学生……

僕はいちいち夕奈が言ったことを書き写す。

「他に分かっている手がかりとかある？」

「もうありません、すみません……」

「謝ることないって」

「とにかく、一緒に帰ろう」

「うん！」

別の話をしながら、帰路につく。

「あ、あのー、十夜くん」

「ん？ どうした？」

「て、手をつないでもいい？」

「ちょっと待って……手を繋ぐ？ ココロの準備がまだだけど……」

「そ、それはちょっと、なんというか……別にダメというわけじゃないけど、ああもう、何を言ってるんだ、僕は……」

女の子の前にしどろもどろしている、恥ずかしすぎて、穴があったら埋まりたくなる。

「もしかして、だ、だめですか？」

「いやっ、と、とにかく、ほら」

僕は自ら手を差し出す。やっぱりそうしないと、オトコマエじゃないかなあ、それに、女の子から手を差し出してくれるのもいやだし……

夕奈も自然に五本の指を広げて、僕の指と絡む。

やわらかい、女の子の手がこんなにやわらかいと初めて分かった。小さい頃、お母さんと手を繋いだこともあるけど、それとは全然違う感触だった。うら若き少女が自ら手を伸ばして、繋いでくれと言って、手を伸ばさない男はいるわけない。

手を繋いでいるおかげで、夕奈との距離もさらに近づいている。もしかして、これが恋する人の気持ち？ 恋の予感に胸がときめく。突然、強風が起こり、夕奈のスカートがめくられる。

ピンク色のイチゴの絵柄がはつきり見える。これは避けられないすばらしい罨。いい目の保養だ。

夕奈が一生懸命自分のスカートを抑えるけど、なかなか風に勝てない。

初めて自然の力の凄さを感じた。ありがとう、ウインド。

「ひゃっ、いやあ、み、見ないで」

「ゴメン」

僕は思わずそっぽを向く。

ほんのちよつとだけでも覗いてみたい。

このスカートの中の神秘的な花園を覗いてみたい。

その気持ちは、たぶん、他の男の子も同じだと思っている。僕も思春期に入るのかな。

しかし、なんとか僕は理性を抑えて、覗かなかった。

この抽選であたる確率より低く、ごく大切なチャンスを逃した僕は、すこしでも後悔している。

とはいえ、なぜか男がスカートの中のパンツを見たら興奮する理由がなんとなく分かった。

色っぽいな、僕は。

夕奈の様子を確認してみる。

「風がもう止まったけど、大丈夫？」

「もう大丈夫です、心配してくれて、ありがとうございます。ただ、髪が乱れてしまいました……」

夕奈が髪をすこしいじって、シャンプーの香りが鼻に漂わせてくる。

髪をいじるたびに、ラベンダー味の香りがどんどん増えてきた。

ふと昔見た夢を思い出した。

自分が夜の大草原に座っている。確かに、周囲が紫色で、おそらくそれもラベンダーだったのかな。

もしかして、夢の中の人って、夕奈と何かのつながりがある？ やっぱり考えすぎ。そんな根拠のない勘ぐりをやめたほうがいい。

ねがわくば、そうでないほしい……

第3話（前書き）

らぶえっちシーンあり。

でも、R18の程度ではありません。

ご注意ください。

流れない涙

第3話

空が茜色に染まり、太陽もだんだんおやすみなさいと言つように入り日がどんどん空から沈んでいく。

僕たちの知らない場所に行く……

「空が暗くなってくるから、早いうちに帰ろうか？」

「うん」

だが、家に着く前に、夜がさきに来てしまった。今日はいつもより早く日が暮れる、一体何が起こるのだろうか？

ようやく、家の近くにたどり着いた。

「今日はいろいろ楽しかったです、あの風がなかったら、ね」

「あはは」

思わず笑ってしまった。

「もう、からかうんじゃないやありません、怒りますよ」

「怒らないで、また強い風があったら、僕が夕奈ちゃんの前立って風を受け止めてやる」

「その気持ち、ありがとう」

今度またこんなチャンスがあったら、おそらく、僕が覗くかもしれない。理性に勝つのはなかなか簡単じゃない。ふたたび勝てる自身はまずない。

不意に思いがけないことが起こった。

空が暗いせいか、僕たちはトラックがこっちに近づいてくること
がまったく気づいてなかった。

どこからクラクションの音が聞こえる。

「あぶないっ……」

僕はすぐ夕奈の身体を強く押す。そして、自分の身体を飛び跳ねて、トラックを避ける。

「バカヤロー、死にてえのか、このバカカップルめ、チキショー」

後ろからドライバーの罵声が聞こえる。しかし、トラックが勢いよ

く去ってしまった。

とにかく、僕たちは無事でよかった。

「危なかった。夕奈ちゃん、怪我とかないのか？」

「大丈夫です、でも、ちよつと離してくださいませんか？」

さっきのトラックをよける際に、いつのまにか身体が夕奈の上ののしかかっているか全然注意してなかった。

「ああつ、ごめんごめん、わざとじゃないから、許して」

「いいですよ、十夜くん、もうちよつとだけ……」

夕奈が僕を誘惑しているのか？ やばい、このままだと僕には勝ち目がない。

そこまでしてくれるなら、もしかして、夕奈が僕のが好き？ 違う、ちがう、チガウ……そんなはずがない。

確かに、今の夕奈のそのなまなましい姿が僕より二十センチも近い距離にいる。

僕が夕奈の顔を見つめている。

「十夜くん」

「はい？」

「あたしの顔、何かついてる？ そんなに目もそらさないであたしを見ていますけど……」

夕奈はその透き通る水のような目で僕を見ている。

もうだめだ、理性が北極まで飛ばされそう。

「ねえ、夕奈ちゃん」

「はい」

「ちよつと、キスしてもいい？」

「どうして？」

さきに僕のことを誘惑しようとするのに、今更どうしてって聞かれるとこっちが困る。

「いや、ただ、キスしたいだけ……」

しらすしらすのうち、言っちゃいけない言葉を言ってしまった……僕って最低だ。

「いいですよ、十夜くんなら……」

「じゃ、目を閉じて」

「どうして？」

また聞かれる、今度はマジメに答えないと……

「恥ずかしいと思わない？ 目を開けたままにキスしたら」

「確かにそうですね、くすくす」

夕奈が目を閉じる。

その瑞々しく、艶やかな唇は、僕の前に……

まるで、ハチミツがいつぱい入っている花が、蜂から採集を待ちこがれているかのように。

僕も目を閉じて、ゆっくりと夕奈に近づいている。

「ちゅっ」

ようやく、僕と夕奈の唇が重なった。

何の味もしないくせに、なんだか甘いと感じられる。それに、ひらひらとしたからラベンダーの香りを漂わせて、なかなか離れたくない。

このままじゃまずいと僕たちが気づき、自ら唇を離れた。

唇との間に、透明な橋のように、糸を引く。

これがキスだったのか？ かえって自分に聞きたい……

「気持ちよかった、夕奈ちゃんは」

「あたしも」

「とりあえず、ティッシュで拭かないと」

僕がポケットティッシュを取り出して、夕奈の唇を拭く。

そして、もう一枚取り出して、自分の唇も拭く。

だが、こころの中の不安、戸惑いが拭えない……

僕が、本当に夕奈のことを好きなのか？ それとも、夕奈が僕のことを好きなのか？ 僕さえ分からない。

どうすればいい？

僕は頭をポリポリとかく。

「どうしたのですか？ 何かありましたか？」

「なんでもない」

暗闇の空が、急に雷が鳴る。

ゴロゴロ……

「いやああ、怖い」

夕奈が思わず身体を寄ってくる。

僕はそのまま夕奈を抱きしめる。

「あたし、雷が大嫌いです」

夕奈の身体がびくびくと震えている。かなり怖がっているようだなあ。

「僕が側にいるから、大丈夫だよ」

「しくしく」

ゴロゴロ……

また雷が鳴る、どうやらアメが降りそうだから、今の家に帰らないと……

ゴロゴロ……

身体がぴりぴりとする、雷が近くに鳴っているせいだろう。

しかし、目の前に、信じられない光景が現れた。

熱を感じる、ありえない熱さ。それは人間から発するのではない。さっきの雷が、夕奈に当たった……

側にいる僕は怪我しなかったのはおかしいけど、夕奈の身体もやけどの傷など一切ない。

「いったいどういうこと？」

僕は早速夕奈の調子確かめる。

「夕奈ちゃん」

「……」

反応がない。

「うそだろ？ 夕奈ちゃん、しっかりしろ」

僕は夕奈の身体を揺らす。

しかし夕奈がそれを気づかないように、口をもぐもぐさせる、何を言っているのか分からない。

「アヴァダケダヴラ……」

「何を言ってる？ 日本語でしゃべってよ」

「ヴォウズムウレーゼ……」

まったく聞き入れてない……

僕はちよつと夕奈の頬をつねってみる。

「いたつ、あう」

「痛いよ……もう、十夜くんってば」

意識が戻ったようだな、よかった。

「夕奈ちゃん」

「ちよつと、何が起こりましたか？」

僕は夕奈を抱きしめる。大切な宝物を手元から離さないように……

「なんでもない、夕奈ちゃんを抱きしめただけだから」

「ああもう、十夜くんのおせつかちですう」

僕の顔を紅潮した。

「と、とにかく、ここはあぶないから、さっさと帰ろう」

「うん！」

家は見えるのに、なんだか遠くにあるような気がする。

トラツクに危うく跳ねられそうになったり、雷が鳴って、夕奈の意識が遠くいって、最後に戻ってきたりして、もうさんざんになった。

もう帰らないと、また何が起こるか僕たちも分からない。

とうとう家に着いた。

「今日はいろいろがありましたけど、楽しかったです。とくに十夜くんと二人だけ……ですね、うふふ」

夕奈が頬を染めながら、自分の唇を人差し指で当てる。

「夕奈ちゃんがそこまで言ってくれると、こっちまで恥ずかしくなるから」

「確かに、それがあまかった……」

やっと僕の顔も赤らめた。

「とにかく、家に着いたら何よりだ、おやすみなさい」

僕は夕奈に手を左右に振って挨拶をした。

突然夕奈の不意打ちを食らって、僕の頬にキスをした。

「ちゅっ」

「おやすみなさい、十夜ちゃん、えへへ」

夕奈が舌をペロリと出して、くるりと背を向けて自分の部屋に戻った。

さてと、僕も戻ろう

……

「ただいま」

「おかえりなさい、どこ行ったの？ 心配してたまらないよ、お母さんは」

「ちよっとハプニングがあったから、帰りが遅くて、すみません」
「……」

お母さんはびくともしなかった、僕をしかる気もなかった。

「いいんだよ、別に」

「十夜ちゃんが無事に帰れたらなによりだね」

「汗びっしょりだから、早くシャワーを浴びてきなさい」

「うん」

僕は脱衣所においてある鏡の前に立つ。

そして、ちよっとだけ指で唇を当てる。

「甘い……」

ほんのりと甘い香りがまだ残っている。それが、うら若き乙女の唇の香りだ。

「いつかまたキスできるだろう」

自惚れる。

「十夜ちゃん、一人ぶつぶつして何を言ってるの？ 早くシャワーを済ませなさい」

「分かった」

まさか、さっき僕が言った言葉が、全部お母さんに聞かれた？
聞かれてもしかたがない

「まあ、いいつか」

「そういえば、今日の夕奈ちゃんがおかしい、変な言葉を言ったり、急に僕を攻められたり、一体何があったのかな？」

夕奈の言葉を反芻する。今日は怪しい事件が立て続けに起こったから。夕奈が雷に当たっても怪我しなかったり、急に変な言葉言ったり……さっぱり分からない。

ぶくぶく。

考え事が多いので、いつの間にか頭は水の中に入ってしまう。

……

遠くからお母さんの声が聞こえる。

「いつまで浴びたいの？ 晩ご飯が冷めちゃうよ」

「ぶはあ……」

危うく溺れるところだった……

呼んでくれてありがとう、お母さん……

そして、僕たちは晩ご飯をした。

お皿洗いも済んだら、ちょっとテレビを見る

ちようどこの時間がニュースの時間だ。

「次のニュースです……」

アナウンサーが今報道しているのは、あるドライバーが急にわけのわからない事故に巻き込んで死んだニュースだ。見るも痛ましい事故現場に、大量の血が流れている、地面が一片の紅色の海に染まっているようだ。酷いありさまのようだ。

トラック高いスピードで壁にぶつかり、フロントガラスがひび割れた。その割れ目はさらにドライバーの頭にぶつかり、粉碎されて、一枚一枚の殺人武器となって、容赦なくドライバーの体に刺した。そんな画面は、モザイクをかけても怖い。

「お母さん……これは、怖い」
「酷い……」

せめて、他の人に巻き込まれなくてよかった、と思いたいけど。こんな死体は、誰も見たくはないだろう。むしろ、そんな死に方は誰も望ましくないと思う。

しかし、一体ドライバーはどういうふうに、こんな酷い目に遭ったのか、腑に落ちない。

もしかして、途中で病気が発作したせいで、救いもなくそのまま死んだ？

ところが、それはありえない。病気だったら、そこまで血が流れるわけがない……

一体どうしてだろう？

まあ、まだ中学生の僕には分かるまいと思う……

「はあ、人生って儂い（はかない）もんだね」

お母さんが呟く。

「十夜ちゃん、自分が好きなこと、やりたいことがあれば、迷わずに先にやりなさいね、自分の能力以内のことだね」

「だからね、後悔しないうちに、自分ができることをする」

「……」

お母さんの言葉はよく分からない。でも、決断していいことではない。い。

とにかく、生きているうちにやらないと後悔することがいっぱいあるから、先にやりなさいってことかな……

今の私にとって、一番やりたいことは……

……

……

……

流れない涙

あつた。

「お母さん」

「なに？」

「今日はさんざん疲れたから、先におやすみなさい」

「おやすみ」

今の私にとって、一番やりたいことは……

寝ることだ。

ようやく日曜日が来た。

せつかくの休みだから、ハメをはずして遊ばないともつたいたい。

朝ごはんを食べたら、僕は出かけようとする。

「行ってらっしゃい、気をつけてね」

「うん、じゃ、行ってくる」

「へんなお姉ちゃんからのキャンディーをもらわないでね」

「……」

普通は中年男性だろう。僕はシスコンじゃあるまいし……

お母さんの言葉に対してなんだか悪寒がする。

「じゃ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

僕は夕奈のところへ行く。

コーンコーン

「誰ですか？」

「僕だ、これから一緒に出かけない？」

「いいですよ、ちょっと待ってください」

「はい」

今の夕奈ちゃんは何をやっているのだろう？

5分後。

「おそい……」

返事がない。もしかして、夕奈に何があったのか？

「開けるよ」

とんでもない光景だ。

夕奈が身体をピンク色のバスタオルを巻いて、左手がドライヤーを持って、右手が髪をいじりながら左手が持っているドライヤーで髪を乾かしている。

そのタオルは、うさぎの絵柄が描かれている。なんだか可愛いなあと思う。それに昨日とは違って、今日はピーチ味のシャンプーを使った夕奈は、意外にタオルと合っている。色といい、デザインといい、申し分ない。

「と、十夜くん？ ちょっと出てもらえませんか？」

「ごめん、わざとわけじゃないから」

「……」

また5分後……

「入っていいよ」

目の前に、ワンピースを着ている夕奈。髪型が三つ編みでもっと可愛く見える。特に化粧はしないけど、唇に似ている色の口紅を薄くつけて、つやつやとしている。パラソルを持っていたらパーフェクトと僕が思っている。

「きれい、まるで天使に見える」

「褒めてくれて、ありがとうございます」

夕奈が照れている間に、夕奈のおばさんが来た。

「あら、十夜ちゃんじゃない？」

「こんにちは、おばさん」

「ねえ、十夜ちゃん、この子は、私の姪の夕奈だ」

「おばさん、もう初対面ではないですよ」

夕奈に自己紹介をさせたいと思ったとき、夕奈が口を挟んで阻止した。ナイスツッコミだ。

「とりあえず、準備オツケー？」

「うん、オツケーです、行きましょつ」

「どこ行くの？ もしかして、デート？」

「ええっ？」

「がーん。」

一発で当てられた、さすが夕奈のおばさんだ。女のカンって、やっぱり怖い。

ちようど出かけようとした時。

「忘れ物がありました。えへへ」

その忘れ物は、なんとパラソルだ。

「もう大丈夫ですよ、行きましょつ」

「二人とも、遅く帰らないように気をつけて」

「うん」

突然、慣れた声が聞こえてくる。

「あらあら、行ってらっしゃい、マイサーン」

運が悪かった。よりによって、お母さんと鉢合わせしたとは思わなかっただろうに。

「……………」

「あら、十夜くんのお母さんにはれてしまいました。うふふ」

「笑ってる場合じゃないだろ、さっさと行こう」

僕たちはすたすたとあるいて、この場から離れる。

「さて、今日はどこに行こうかな？」

「おまかせします」

「うゝん」

どこに行ったらいいのか僕が迷っている。

ハメを外して遊ぶところといえば、遊園地なら出来るのでは？

よし、そこで決定。

「遊園地に行こうか？」

「……………うん！」

夕奈は嬉しそうに頷いた。

お小遣いは大丈夫かな、かなり心配している。

お母さんのところに戻って、お金をせがむわけにもいかないし、夕奈に払ってもらうわけにもいかない板ばさみになる。

もう行ってしまったから、挽回することもできないから、思い切っ行ってっちゃうしかない。

僕たちは遊園地についた。目の前に、大きな看板で「ようこそTDA」って書いてある。確かに、TDAは東京ダジャレアミューズメントパークの略だけど、なぜかPが抜けているか、その理由は誰でもわからない。

「夕奈ちゃん」

「ん？ なんです？ 十夜くん」

「先に何をやりたい？」

「うーん あの大きな機械で、そしてスピード早くて、傾斜が強い斜面で勢いよく滑走して、グルグル回って、みんなが楽しく叫んでいるアレを遊びたいです」

大きな機械、傾斜が強い、グルグル回る、まさか……

ジェットコースター？

心臓に悪いので、やめた方がいい。ぶっちゃけ自分が怖いだけだ。しかし、自分が怖いという言葉を口から出せないだろう。

こういう場合は、遠回しにやめさせるしかない。

「あのおう、夕奈ちゃん」

「はい？」

「それはジェットコースターというものだ。みんなが楽しく叫んでいるじゃなくて、怖くて叫んでるだけだ」

「怖くて、そして叫びますってこと？」

「うん、そうだ。夕奈ちゃんが泣くかもしれないから、やめた方がいいと思う」

「うーん 別に泣いても大丈夫じゃないですか？ 十夜くんがずっとあたしの側にいるから」

「ジェットコースターを乗りたくて乗りたい」

「……」
「乗りたい、乗りたい、ジェットコースターを乗りたくいです」
「……」

もはや反抗の余地はない、乗るしかない……

例えば自分が怖くても、男らしさをアピールしないと……

僕はおずおずとジェットコースターのカウンターに行く、隣の夕奈が楽しそうに見えるのに……はあ

「何名さまですか？」

「2名です」

「好きな席にどうぞ」

よかった、ちょうど人が多くないから、もうちょっと後ろに座る。ジェットコースターのかなり後ろの席に歩いて行く時、夕奈が思いがけないことを言った。

「十夜くん、一番前に座りませんか？ あたし、前に座りたいです」

「……」

一番前に座ると、僕はマジで死ぬぞ……やめてくれ。

でも、後ろに座りたいとおいそれと言えない。

あげく、僕も夕奈と一番前の席に座ったハメになった。

「はいはい」

「それでは出発します」

十夜、逝って来ます……

スタップが機械を操作するとともに、ジェットコースターが動き始める。

そして、だんだんと昇っていく。

「十夜くん、見て見て、周りの景色がきれいですね」

「……」

景色を眺める場合じゃない……

「ほら、十夜くんも見て」

「……」

僕は最初から目を閉じている……目を閉じたら、すこしでも怖く

なくなるだろうと思う。

ジェットコースターが一番高いところで止まり、そして……
急速で一気に落下してしまう……

「うわわわああああ、たぐすくけくて」

おそらくこのスピードじゃ80キロ以上もあるだろう。

一瞬だけ、ビルから飛び降りる感覚を理解した。

だが、スピードがなかなか減らず、かえって加速していくような
気がする。ちよつとだけ目を開けてみると、360度回転のループ
が2回もその先にある。

神さま、僕はまだ若いから、そのまま僕の命を奪わないで……と
祈っている。

「あははは、楽しい〜」

夕奈はそれをものともせずに、楽しく叫んでいる。

初めてジェットコースターに乗って怖がらない女の子なんている
はずがない……ありえない。

後ろからの叫び声と夕奈の叫び声が飛び交って、僕の意識がだん
だん弱くなっていく。

ならば、僕も叫ぼう

「うわああああああ……」

僕はまだ目を開けてみる、目に映る景色がまったく違う。

今はループを回転している最中だと気づかなかつたのだ。

「お、おっ、落ちるううう……」

僕は絶叫する、しかし、聞いてくれる人はいない。

なぜなら、他の人も叫んでいるから。

怖くても、目を閉じて、叫ぶしかない。こんな絶体絶命の窮地に、
大事なことを思い出した。

夕奈がスカートを着ている……

ループを回転すると、スカートがそのまま遠心力を受けて、下を
向いている。

つまり、パンツが丸見えになってしまう。

「あははは、楽しい〜」

本人はまったく気にせず、無我夢中で楽しむ。

ジョットコースターのスピードがだんだん減っていく。

やがて

最初の位置に戻り、そして、止まった。

たった2分間の間に、何回も死んだような気がする。

心臓が飛び出しそうだった。戻ってきてよかった……

「楽しかったです」

「ああ……」

恐怖の余りに顔を青ざめた。

「どうしたんですか？ 顔が真っ青になって」

「いや、なんでもないけど、ちょっとトイレ行ってくる」

「とりあえず、そのベンチに座って待ってね」

「はい」

夕奈をベンチに座らせる。

そして、僕はトイレに向かって、顔でも洗う。

「ふはああああ、生き返った」

リフレッシュした。

でも、夕奈の前にこんな姿になって、無様だった。

次はちゃんとアピールしないと……今回の遊び（ある意味デート）

は台無しだ。このまましくじるわけにはいかない。

まず、財布を確かめてみる。

まだ余裕かな、アイスクリームでも買って来ようか。

……

アイスクリームを売っているおじさんがいた。

「チョコとバナナ一つずつください」

「400円です」

「はい」

「ありがとうございます」

僕はアイスクリームを持って、夕奈のところに戻る。

「遅いですよ、十夜くんつてば」

「ごめん、変わりにアイスクリーム買ってきたから、さあ、溶けないうちに食べて」

「うん、ありがとうね、十夜くん、大好き」

夕奈は下をぺろりと出して、アイスクリームを食べ始める。

「美味しいです」

「早く食べ終わって、次のゲームに行こう」

「うん」

僕たちはすばやくアイスクリームを食べ終わった。

「じゃ、次はどこ行こうかな？」

「テレビで見たの、たくさんの方が変な服装を着てオシャレをしてあるハウスの中にお客さんを待って、お客さんに出会ったら挨拶をするところへ行きたいです」

オシャレ？ お客さん？ 挨拶？ まさか……

「夕奈ちゃん」

「ん？」

「変な服装つて、どんな服装つて分かる？」

「わかりません、えへへ」

「……」

「そこはとても暗い？」

「とても暗いとは言えないですけど、一応暗いですね」
間違いなく、お化け屋敷だ。

「夕奈ちゃん」

「はい？」

「あれはジェットコースターよりずっと怖いけど、大丈夫？」

「うん、十夜くんが側にいるから、なんでも怖くなくなりますう」
「……」

僕はそうじゃないけど。

夕奈がそんなことが言うなら、つまり、僕は夕奈に安全感を与えられる？

それぐらいは分かっている。

ありがとう、浩平。おまえのムダ知識はたまには役に立てるよな。僕たちはさっそくお化け屋敷に向かう。

「いらっしやい、ようこそ」

「二人です」

「はい、どうぞ」

僕たちはお化け屋敷の入り口に向かう。

入ったとたん、周りが暗くなってきた。時折聞こえてくる誰かの喘ぎ声、そして、館内に流れる怪しい雰囲気音楽、さらに唯一の明かりとした照明器具のキャンドルは青色で人だまに見えるしかない。

「十夜くん、どこにいます?」

「心配しないで、ずっと夕奈ちゃんの側にいるから」

「ほら、手を出して」

夕奈は手を出して、私の手と繋いだ。そのやわらかい感触は再び感じられる。やっぱり男の手とは大違いだった。

僕たちはゆっくりと歩き続ける。

さらに、違うエリアに着いた。

しかし、ここはさっきのところとかなり違っている。

キャンドルがちらちらとする。動いていないけど、それだけでも十分怖い。明滅の時間をしっかり掴まないと前に進みづらくなる。

「ねえ、どうしよう? あたし、こわいです」

「僕が先に歩く、夕奈ちゃんを守るから、大丈夫」

「うん」

夕奈は消え入りそうな声で答える。

突然、変な声があった。

「アタシヲオイテカナイデ」

どこかの罫に陥るらしく、右側から血まみれのからくり人形が出た。

「うわああああ……助けて、十夜くん」

からくり人形に驚かせるより、夕奈の叫び声にぎよっとした。

「目、目を閉じて」

怖いから、目を閉じるのは常識だと思いつつ、そう夕奈にアドバイスする。

しばらくすると、からくり人形が消えた。

僕たちはさらに歩く。ようやく出口が見える。

しかし、突然、キャンドルの明かりがすっかり消えてしまう。そして、両側から変な声が聞こえる。

その時、あるお化けの少女が懐中電灯を持って、こっちによってくる。

「オカエリナサイ、アイジンヨ」

「うえええええ」

僕はぞっとした。

この仕掛けはわざとだろう？

もともとカップルがお化け屋敷に入るのが一番多いからといって、こんな仕掛けを装置とはさすがに喧嘩を売ってるように見える。

「十夜くんはあたしのもんですから、誰にも譲れません」

夕奈がめげずに少女に言う。

しかし、あたしのもので、いくらでもそれは言い過ぎる。

だが、少しでも心の中に喜ぶ。

「……………」

そこまで言わなくても……………」

僕たちは懐中電灯の明かりを利用して、出口に向かう。突然、視界が遮られて何も見えなくなる。

「んんん……………」

「うわあああ、十夜くん、て、手が」

「繋いでるけど？」

僕は意識した、上から仕掛けがあつて、突然落下した誰かの手（偽もの？）が僕の顔に当てる。

僕は慌てふためいて手をかき分けて、やっと視界が見える。

「走るぞ」

「うん」

僕たちはひたすら走って、出口に向かう。

「ふはぁ、怖かった」

「しくしく」

夕奈が泣きそうな顔で僕を見ている。

「うえええええん」

「泣かないで、僕がいるから」

「うぐっ」

「テレビとは全然違いますう、えぐっ……」

僕は子供をあやすように、夕奈を撫でる。

「もう大丈夫だから、泣かなくていいから」

「んぐっ」

しばらくして、夕奈が泣き止んだ。

それが、5分後のことだ。

「ほら、笑って」

「えへへ」

泣き顔から笑顔に変わってしまう。

「では、次は僕が提案する」

「ぐーぐー……」

まだ次はどこに行くか行っていないのに、お腹が抜け駆けして、自分の意見を出してしまった。

「くすくす」

「それより、飯にしよう」

「うん、好きにしていますよ」

「……」

僕は先に財布の中身を確認してみる。

樋口一葉一枚、これじゃ足りるだろう。

「じゃ、あっちのファミレスにしようか？」

「……うん」

……
……

いらつしゃいませ、何名様ですか？

「2名です」

「席をご案内いたしますので、少々お待ちください」

「お願いします」

しばらくすると、席についた。夕奈は、もう先にメニューを見ている。

「どれがいい？」

「えっと」

突然、夕奈の目がきらめくように見える。

「このステーキがおいしそう……あっ、サラダもおいしいなあ、パフェもいいね、迷っていますね」

「ふわ〜あ」

きつと夕奈の頭の中に、いろんな食べ物の形をイメージしているだろう。

「夕奈ちゃん、夕奈ちゃん」

「ふわ〜あ」

返事が来ない、完全に無我夢中になっている。

僕は夕奈の耳に息を吹きつける。

「きゃはは、くすぐりたい……」

夕奈の大声で、みんなの視線が注がれる。

「びつくりしないでよ」

「おい、声がデカイって」

店員さんが突然寄ってくる。

「すみません、お客さん、店内でなるべく大声で話さないでくださ

い

「すみません」

「す、すみません」

ぐーぐー

まずい、僕のお腹がまた鳴っている。早く注文しないと。

「とりあえず、何か注文しよう」

「じゃ、これとこれで」

……

……

「お腹がパンパンになった」

「あ、あのう、デザートを食べたいですけど……いいですか？」

「いいよ、どれどれ？」

夕奈はメニューを見て、目標を探している。

「これでいい？」

夕奈がさしているのは、かなり高いチョコパフェ、しかも、カロリーは値段より高い。これを食べたら太っても知らないよ……

「おいしそうけど、太るよ」

「大丈夫、一緒に食べましょう」

「そうしよう」

いきなり禁句を口に出してしまった。だが、夕奈は全然怒っていない。

……

流れない涙

「お待たせしました。ご注文のチョコパフェです」

僕たちは見つめながら、チョコパフェを食べる。もともと甘いチ

ヨコは、さらに甘味を加える。まるで砂糖を食べているような甘さだ。

「少しここで休憩しようか」

「うん」

他愛のない話をしながら、時間がどんどん過ぎていく。

あつという間に、6時半時だ。

「もう6時半だ」

「そうですね」

「つれて行きたい場所がまだ1つ残ってる、時間は大丈夫？」

「大丈夫です」

僕が最後に夕奈をつれて行きたい場所は……

「手を貸して」

「うん」

僕は夕奈と手と手を繋ぎながら、大観覧車の方へ行く。

「いらつしやいませ」

「二人です」

「かしこまりました」

チケットをもらった後、僕は夕奈に手を伸ばす。

「さあ、どうぞ、マイプリンセス」

「プリンセスって恥ずかしいです、普通に呼んでもらえます？」

「あ、ごめん」

「あらためて、どうぞ、夕奈ちゃん」

「うん」

夕奈がワンピースの裾を掴んで、ゆつくりと観覧車を乗った。

観覧車が徐々に動き始め、空へと上がっていく。

周りが見えなくなるほど暗くなっているけど、夕奈の身体がだんだん光っているように見える。

「夕奈ちゃん」

「なに？ 十夜くん」

「どうして光ってるんだ？」

「光ってる？ これですか？」

夕奈はつけているペンダントを取り出して見せる。
上弦月のペンダントだ。僕がつけているペンダントと似ているな
特性を持っている。

「これが光ってる？」

「うん、周りが暗くなると、これが光りますよ、蛍光ペンダントで
すから」

蛍光ペンダント、聞いたことない。停電になっても、これを取り
出したらいけるじゃない？

「ちなみに、これは、お母さんがくれた大切なものです」

やっぱり夕奈も大切なものを持っている。でも、人間がその大切
なものが失ったら、一体どうなるのか知りたい。

大切なものなら、どうやって大切にする？

「もし私はこれが欲しいと言ったら？」

「十夜くんが欲しいと言ったら上げますよ」

「じゃ、やっぱり要らない」

予想外の結果、夕奈はあっさりと答えた。大切なものだと言った
のに、そう簡単に他人に譲るわけがない。

「どうして？」

「夕奈ちゃんの大切なものだから、勝手に奪っちゃいけないから」

「このペンダントより、今のあたしは大切にしているのは、十夜く
んです」

いきなり夕奈の爆弾発言を受けて、僕は何を言えるか分からなく
なった。とりあえず、女の子がそこまで言ったら……

つまり、チャンスが来た……今のうちに言わないと後悔するかも
しれない。

「ボク、僕は」

「なに？」

「僕は、夕奈ちゃんのことを好きだ」

「世界中の誰よりも夕奈ちゃんのことを好きだ」

「こんな僕だけど、いい彼氏になれるかどうか分からないけど……」
「でも、僕ががんばる、頑張るから」
「僕と付き合ってくれない？」
「……」

夕奈は何も答えなかった。

ただ、目から涙がぽとりと落ちる。それが、うれしさのあまりに泣くに違いない。

本人は答えなかったけど、それだけで分かると思う。

夕奈の涙は、まさにその答えだ。

僕の質問に「はい」と答える気持ちだが、ちゃんと伝わってきた。

「うれしいです、あたしうれしいです」

「田舎に生まれて育ったあたしに愛想をつかさずに受け入れて、ありがとう」

「ありがとう」

夕奈が自ら目を閉じて、頬をこっちに寄っている。

まるでキスを求めるかのように……

僕はその行動に感じて、目を閉じる。

そして、唇が重なり合う。

「ちゅっ」

夕奈からチヨコの香りがする。そして、僕からのバニアの香りが混じって、別格の味になる。

あつという間に、夕奈の唇だけでなく、身体も求めたくなる。

このままじゃまずいと意識している。

でも、理性が勝てなくて、手が無意識に変なところに移っている。

「あっ」

夕奈が変な声を出す。

「そ、そこ、だめです」

「あ、あっ……」

夕奈が力づくで抵抗する。

ダメだ、僕の理性が遠くなっていく。

流れない涙

それをやっちゃいけないと分かっているのに。
僕の手がゆっくりスカートの方に移動する。
もうダメだ。誰か止めてくれ……

第4話

突然、一枚の黒い紙のような空が、さまざまな色に彩られ。鮮やかになった。

花火だ。

花火が打ち上げるとともに、僕の意識が戻った。

地面から一気に空に打ち上げた花火が、一輪の花となり、咲き誇れる。やがて、その花が次第に散っていき、暗い空に飲み込まれた。たったの十秒だけで、花火が自分の役目を果たして、消えていく。

まるで蛍が発光した後、自分の役目を果たしたら、さらに死んでこの世から消えるに等しいとも言えるだろう。

寿命はかなり短いけど、自分の役目を果たせるなら、それでいいじゃない？

「きれい〜」

「うん」

僕は思わず手を夕奈から離れた。自分がさつき夕奈を犯そうとする行為にすごく後悔する。

お互いに好きっていうならば、決して相手はダメとか言わない。

「さつきはごめんなさい、いつの間にか変な行為はやっちゃって」

「……」

夕奈は何も言わずに、ただ頬を染めて、顔を紅潮した。さぞ恥ずかしそうだろう。

「それより、花火を見ませんか？ せつかくのチャンスなのに」

観覧車がかなり高いところに回っている。

この角度から見ると、全体的に眺められる。花火と一番近い距離で、そして……

好きな人と一緒に……

結局、夕奈はさつき僕がしでかしたことに対して何も言わなかつ

た。

何も言わなかったからこそ、逆に怖く感じる。

乙女心って理解しにくいもんな。

「帰ろうか？」

「うん」

観覧車を限りとして、僕たちは遊園地から家へ戻ることにした。

おそらく僕がやったことのせいで、あんまり夕奈と話さずにゆっくり歩いているだけになる。

「あのう」

「あのう」

僕たちは同時に話し出した。

僕は夕奈のことを気にせず、先に話す。

「さつきからずっと言いたかったけど、なかなか言えなくて」

「本当にごめんなさい」

「……」

相変わらず、夕奈はひとことも言わなかった。

ただ、僕の頭を軽く撫でる。

「あたしのが好きなら、こんなことをされても許します」

「もちろんだ、こんなことは好きな人だけとしないと……」

夕奈は開き直った。

「はいはい、この恥ずかしい話はここでおしまい」

「早く帰らないと、お母さんにしかられますよ」

僕は腕時計を見る。

もう9時過ぎだ。

「ええ、もうこんな時間だ、夕奈ちゃん、急ごう、おばさんは心配するだろ」

「うん」

「今日はいろいろ、ありがとうございました、アイスクリームと、十夜くんがあたしに使う大切な時間と、そして、キ、キス……」

夕奈が消え入りそうな声で言う。

「こちらこそ、女の子と遊んだことない僕と付き合ってくれて、ありがとう」

「うん、それでは、おやすみなさい」

「その前に」

「ん？」

僕はすばやく夕奈の頬にキスした。

夕奈の顔がバラより赤くなって、もじもじしている。

「あ、ありがとう」

「じゃ、おやすみ」

「うん！ おやすみなさい」

「ただいま」

「あら、遅いね、もしかして……」

「夕奈と何かイケナイことをしちやっただ？」

イケナイって。

「何もしなかった、しなかった」

僕は頭を左右に振る。

危うくイケナイことをしたところだったのに。自分の良心を呵責かしゃくする。

「晩ご飯もう食べた？」

「うん、食べたよ、夕奈ちゃんと一緒に」

「あら、よかったね、捗ってるわ」

「頑張ってるね、十夜ちゃん」

またからかってくる。

「何を頑張る？」

「なんでもない、なんでもない、えへへ」

お母さんは笑い声でお茶を濁した。

「……」

「明日また学校があるから、僕はもう寝る」

「はい、おやすみなさい、十夜ちゃん」

「おやすみ、お母さん」

僕はベッドに寝転がっている。
たぶん、夕奈も寝たかな。携帯があればいいのに、もっと夕奈と話したい、それが、恋する男女の気持ちっていうもの？

しかし、僕の知らないうちに、隣に何か変なことが起こっている

僕は変な夢を見た。誰が誰か全然わからない。

「あ、あなたは誰？」

「私？私はあなたですよ。」

「あなたは私？何を言っている？分からない、あたし分からないよ？」

「人を好きになることができないと分かっているくせに……」
人を好きになれない？ 何だよそれ？ 冗談じゃない？

夕奈は腑に落ちない。

「どうして、あたしは分からない、どうしてあたしは他の普通の人のように他人を好きになれないの？ 答えて」

「その理由はない、なぜなら」

「あなたは私だから」

「あなたがもし誰かを好きになったら、その人の回りの人が不幸になる、それは、取り返しがつかない事実だと分かってく」

「そろそろ時間だ、さあ、お眠りなさい」

どこからの一道の光が射て、夕奈の身体を射抜かれた。

「あああああ」

痛みを感じてないけど、身体力がだんだん抜けていく。
むしる吸われていく。

助けて、十夜ちゃん……

翌日、僕はいつもの通り起きる。

なんで昨日はそんな夢を見たのか理解できない、もう一人の夕奈？ 好きになれない？ さまざまな言葉は頭の中に入って、夕奈への不安を苛立たせる。

「おはよう、十夜ちゃん」

「おはよう、今日はちよつと早く学校に行きたいから、朝ごはんはなしでいい」

「あら、めずらしいね、何があったの？」

「何も無いから、心配しないでね」

お母さんに心配をかけたくないから、あえて嘘をついてしまった。何か悪い予感がする。

「頼む、何も起こらないように」

言葉を呟きながら、僕は出かける。

「行ってくる」

「行つてらつしゃい」

僕は思わず夕奈のところに行つて、ドアを叩く。

「夕奈ちゃん、いるのか？」

……

返事がない

僕はもう一度ドアを叩く、もっと力強くして。

「夕奈ちゃん、おばさん、いるか？ いたら返事して」

「夕奈ちゃん、おばさん」

何度も呼んだけど、返事がない。

ずっとここにいても仕方ないから、僕はさきに学校に行くことにした。

途中、夕奈の姿が見える。

「夕奈ちゃん」

「……」

夕奈は脇目も振らずに、そのまま行ってしまった。だが、僕の目

に写る夕奈の目は、血のごとく赤い、それに、なんとなく殺気も感じられる。とんでもないことも起こったらしい。

僕は黙ってその場で立ち尽くした。

何があったのか？ やっぱり昨日のことを怒ったのか？

引き続き、僕は夕奈を追跡する。

だが、夕奈はいつもと違って、異常なスピードで歩いている、僕は走っても追いつかないスピード……やっぱりおかしい。

もしかして、昨日の夢を何の関連があるのか？

腕時計を見て、もう8時20分だ。一時限目まであと10分だ。

急がないと間に合わない。

とにかく、学校に戻るしかない。夜になったら、夕奈が家に戻るだろう。

僕は急いで学校の方向へ向かう。

途中で、浩平と出会った。

「よっす」

「おはよう」

軽く挨拶をした。

僕は浩平のところに行こうとした時……

「くっ、ぐはぁ……」

突然、浩平の口から、血反吐を吐き出した、さらに、赤い液体がドロドロと流れ出す。

間違いなく、浩平の血だ。

「うわぁぁぁぁ」

痛みを耐え切れずに、浩平はのた打ち回る。

その理由は、謎の少女が鎌を持って、浩平の背中を薙いだということとは明白だ。

そして、浩平が瞬間力を失って、パタンと倒れた。

僕は少女に怒鳴る。

その少女はマントを身にまとして、顔まで遮られたせいで、一体誰かわからない。

「そこのおまえ、何者だ？」

「……」

「それはあなたには関係ない」

「私はただ、私の役目を果たすだけだから」

「それじゃ」

そのあと、少女は背を向けて、行ってしまった。

「待って……」

「……」

結局、謎の少女は誰か分からずじまいだ。

何も出来ない僕は、力をなくして、跪いて、浩平を抱いて悲鳴を上げた。

「そんなのいやああああああああああああああああああああ」

僕は立ち尽くした。

浩平に何もしてあげられない自分を嫌う。

ビーポービーポー……

救急車の音が聞こえる。誰かが呼んでくれるのだろうか？

しかし、浩平はとっくに気絶した。

どうか、間に合いますように。

僕は学校に戻って、先生に報告しないといけないから、浩平の側にいられなかった。

「すまん、浩平、許してくれ……」

自分を痛恨する。

僕は走って学校に行く。

「ぜえ……ぜえ……」

ようやく校門についた。

誰もいない。今日は休みじゃないのに、何故誰もいないのか？

その時、ある知らない女の子がこっちに寄ってくる。

同じ制服を着ている女の子が目の前に立っている。顔から見ると、僕より年下の女の子に見える。制服は僕が着ているのと同じで、学

校の後輩に違いない。顔は、気の強そうな女の子に見える。

「誰だ？」

「はわつ、びつくりした」

「それはこっちの台詞だ、それより、名前は？」

「わたし？ この学校の1年生の結末というの、よろしく」

「弓？」

「ちくがう、結いの『ゆ』、未来の『み』、結末」

「あ、ごめんごめん、僕は十夜、よろしく」

「わざと間違ってるじゃないですか？」

「いや、それより……」

謎がだんだん大きくなるから、もう自己紹介している場合じゃない。

「今日は休みじゃないのに、誰もいないって、何かあったって知ってる？」

「はああ……」

結末はため息をついた。

「さっきのこと、全部見たから」

「!？」

僕はあつと魂消る。

「ちなみに、救急車を呼んだ人も私……」

「学校の人を非難させる人も私……」

「へえ!？」

すごいな、結末。

「とにかく、町中に暴れている少女に見つからないように、早く家に戻って」

「分かった、結末ちゃんも気をつけて」

「うん」

僕は脱兎の如く、走って家に戻る。

ますます不安が募る。

『あなたがもし誰かを好きになったら、その人の回りの人が不幸に

なる、それは、取り返しがつかない事実だと分かってくれ』
夢の話进行い出した。

『あなた』って一体誰のことを指しているのか？ 僕？ 夕奈？
それは分らない。

願わくば、これ以上他の犠牲者が出ませんように……
やっと家についた。

僕はドアをアンロックして、入ろうとする。

「お母さん、いる？」
僕は叫ぶ。

だが、家の中に誰もいない。

僕は慌てふためいてあちこちを探す。

まずは部屋、いない。

ただ部屋のドアを開けるだけでなく、たんすのドアも開けたけど、
いなかった。次はトイレ、だが、そこにもいない。最後はバス、あ
いかわらずいない。

一体お母さんはどこにいるのか？

心の中の不安が拭えない。かえって募っていく。

ここで待っても仕方ないから、僕は街に行ってお母さんを探そう
とした。

「お母さん、どこにいる？」

静まり返った街中に叫ぶ。

それにしても、答えてくるのは、こっちに吹いてくる風だけだっ
た。

商店街に行こうとする、お母さんはそこにいるかもしれない。

「お母さん……どこにいる？」

商店街の中で叫ぶ。

「はい、ここにいるよ〜」

それは、間違はなく、お母さんの声だ。

「やっと見つけた、お母さん、よかった」
消え入りそうな声でお母さんに言う。

「あら、何があつたか？ 十夜ちゃん、学校は行かないの？」

「ううん、いろいろ事情があつて、今日は休みになった」

「とにかく、お母さんはここにいてよかつた、うぐっ」

あれ？泣きたいけど、だが、なんだか涙が出てこない……

なぜだろう？

お母さんを見つけた気持ちを表したい……泣きたい……だが、涙腺から何も出られない

そんなこと、ありえない。

もしかして、何年間も泣いたことないから、もう泣くということ
が完全に忘れてしまつて、泣けなくなつた？

『笑いたい時に笑う、泣きたい時に泣く、それは、私たち生まれて
から分かる常識……』

『ただ、さまざまの感情の中に、もし、一つの感情が奪われて、こ
れからも表せなくなつたとすれば、あなたはどうします？』

ふと夢のことを思い出した。

なぜ僕は泣けなくなつた？ なぜ僕は狙われている？ なぜ僕だ
け？

「 つつ」

頭がズキズキと痛む。

ここに悩んでも無駄だ、早く家に戻らないと……

「お母さん」

「はい？」

「ここは危ないから、早く戻つて、僕と一緒に」

「あぶない？ それより……」

「さっき買い物に行こうとしてここに來たけど、どこの店も閉まっ
ているつて」

「十夜ちゃん、やっぱり何があつたか？」

「後で話すから、とにかく、早く一緒に戻ろう」

その時、ある人影が僕たちの前に現れた。

「お母さん、下がって」

僕は警戒する、もしそれが夕奈だったら、すぐ逃げる。そうするしかない。

「ん？ どうしたの？」

「とにかく、下がって」

「あつ、うん」

人影の方から声が聞こえる。

「ちわつす」

結末の声だ。ほっとした。

「もういいよ、お母さん」

「お母さん、その人は僕が通ってる学校の後輩、結末だ」

「結末と申します、よろしくお願ひします」

結末は礼儀正しくお母さんにお辞儀をする。

「十夜のお母さんです、息子はお世話になりました。こちらこそよろしくお願ひします」

「いえいえ、今日出会ったばかりですから、あはは」

「あらあら、そうなのですか？」

「くすくす」

お母さんはこつちを見て、笑っている。

僕は二股なんかかけてないよ。ああもう、変な誤解をしないでください、お母さんってば。

ちよつと口を挟んでみないと……話をそらしたい。

「結末ちゃん」

「どうした？」

「どうしてここにいる？」

「さっきこの人を避難させたから、これから病院に行こうと思つて……」

「病院？ 浩平の調子でも見に行くのか？」

「そうそう、わたしのせいで、夕奈を止められないから、浩平がこんな酷い目に……っく、……くすっ」

結末が地面にしゃがんで泣いている。

「泣かないで……結末のせいじゃないから
そうだ、あの少女のせいだ。」

「ところで、浩平って、十夜ちゃんの友達？」

「うん、学校で唯一の仲良しだけど」

「では、浩平くんは病院にいる？」

「うん、これから行くこうとする、お母さんも一緒に行く？」

「別にかまわないけど」

行きたくなくても行かせてやる。

どうしてもお母さんを一人にさせないから。

もし、このままお母さんを家に帰らせら、何があったら、僕は一生も自分を責めるまま生きていくことになる……

僕たちは3人で病院に行く……

カウンターに行つて、ちよつと情報聞いてみる。

「すみません」

「はい、なんででしょうか？」

「さつき怪我して運ばれたけが人がいます？」

「少々お待ちください、今チェックしますから」

「お待たせしました。えつと、一人しかいませんけど
一人？ 他の人はいないのか？」

やっぱり、浩平のような犠牲者が一人しかいなかった。

『あなたがもし誰かを好きになったら、その人の回りの人が不幸になる、それは、取り返しがつかない事実だ』

誰かを好きになったら、その人の回りの人が不幸になる？ ふざけんな、どういう理^{ことわり}だ？

まさか、その『誰か』のことは、僕のこと？

とりあえず、浩平の様子を見る。

「その人は今どこにいるかを教えてくださいませんか？」

「あなたたちはけが人の身内ですか？」

「いいえ、友達です」

「けが人は集中治療室にいます」

「ありがとうございます」

集中治療室の中に、浩平が伏せている。隣に一人の医者がいる。浩平を看護しているようだ。

「ひどい、誰か浩平くんこんなことを」

お母さんはすすり泣く。

これだけを見て、結末がまたしゃがんで、泣き始める。

集中治療室に入られたら、死に直面しているということになると
いう可能性が高いつて先生から聞いた覚えがあるって思い出した。

浩平、おまえが先に行ったら、僕の最後の友達も失くした……

早く元気になってくれ。

恋人なんかどうでもいいから、元気になったら、また一緒に遊ぼう……

二人だけを見て、僕も泣きたくなかった。

だが、同じく涙が出なかった。声しか出られない。一体、僕の身体に何の変化があったのか？ そんな滑稽なことは人間の体にはないはずだ。

僕は無言のまま、病床に伏せている浩平を見て黙っている。

時間がだんだん過ぎていく。

「そろそろ行こうか、ここで泣いてもなにもならないから」

「謎の少女を探して、直接に聞かないと、なにも解決できない」

「うん」

泣きやんだ二人を宥めて、僕たちは病院を後にした。

今の時間は午後4時、街中に誰もいない……皆は生きられるために、既に家に戻って、避難してしまった。

風の音もはつきり聞こえるような静けさの中に、僕たちは歩いている。目的は一つしかない。謎の少女を見つけ出して、そして、問い質すこと。

身の安全を前提として、僕たちは3人で探している。いざという時でも、男の子がいるから。だが、お母さんと結末を守りきれぬ自

信がない……

探しに探しても、なかなか見つからない。

「うふふ、見つかった」

その声が、謎の少女ではなく、夕奈の声だ。

「あつちだ、早く！」

「はい」

「うん」

急いで声の行方を捜す。けど、心当たりはない。

上なのか、下なのか、左なのか、右なのか、全然分からない。

「うふふ、こつちだよ」

夕奈は再び話す。

今回はちゃんと声の行方を掴めている。学校の屋上だ。

「夕奈ちゃん」

僕は叫ぶ。

「……」

夕奈はあいかわらず声を出さなかった。

「今すぐそっちに行くから、待って」

僕たちは急いで屋上へ向かう。

「!?!」

夕奈が端っこに座っている。

夕奈は何も知らないぶりに、恬としている。

「あら、夕奈、危ないよ、早くこつちに来て」

「……」

「ど、どうしよう？ このままじゃまずい」

「とりあえず、結末ちゃん、お母さん、僕一人で夕奈のところに行

くから、ここでじっとして」

「うん」

僕たちは一緒に屋上に上る。そして、僕一人で夕奈に上る。

二人は頷いて、僕はゆっくりと屋上の端っこ、夕奈が座っているところに近づく。

二人は夕奈に見られない場所に隠れて、状況を見ている。
「来るな！」

「!?!」

夕奈は突然大きな声を出して、僕は驚愕した。

お母さんと結末は固唾を吞んで、状況を見ることしか出来ない。

「なぜだ？ 代わりに、一緒に帰ろう？」

「いやだ！」

「.....」

「ねえ、夕奈ちゃん.....」

「ワタシは、夕奈じゃない.....」

第5話

夕奈の返事に何も言えなかった……顔は夕奈とそっくりの女の子の口から、自分は夕奈じゃないって。

「夕奈ちゃんは夕奈ちゃんだ、他の誰にもない……」

「黙って！」

「……」

僕はその場で立ちつくした。何度も自分が夕奈じゃないことを言うに無力感を感じる。

「ワタシは夕奈じゃない」

「ワタシは、夕音」

夕音？ ひよっとして、夕奈とそっくり顔の双子？

僕は夕音の答えに窮する。夕奈、夕音？ 一体誰が誰だろう？

「もう話が済んだから、帰ってください」

「えっ？」

後ろにずっと見ているお母さんはいきなり声を出した

「誰だ？」

一道の光が夕音のところから放って、結末とお母さんが隠れている場所に一直線と向かっていく。間違いなく、浩平が当たった光と同じだ。

「危ないっ」

突然結末がお母さんの前に立って、防壁^{バリヤ}を張って、お母さんを守った。

「ちっ、防いだか……」

僕はその二人を見て、目を丸くした。

ここは現実？ 夢？ それとも、現実でも夢でもない世界？

僕は思わず頬をつねってみる。

「いてっ」

痛みを感じられる。ここは現実の世界だな。だが、現実の世界で

こんな攻撃を使える人がいるなんて不条理だ。

「やめて」

またどこからの声が聞こえる。

「あつ、ぐはっ」

わけの分からない痛みが出て、夕音はのた打ち回る。

「夕音、やめて」

夕奈の声、だがどこからか分からない。

「だっ、黙って、静かに、眠ってえ……」

今度は夕音の声だ。

「黙らない……助けて、十夜くん」

今度は夕奈の声だ。

夕奈と夕音の声が順番で次から次へと出ていて、夕奈がどこにいるか確認できなくなった。

結末もお母さんもずっと何も出来ないまま、僕と夕音を見ている。

「ああああああああああ」

夕音がもがくことさえできなくなって、地面に倒れた。

「夕音」

「行かないで」

結末がしゃべりだして、僕を止めた。

「夕音はまだ気絶してない」

「アリーズドミール、アーメン」

「と、十夜くん、た、す、け、て……」

これが、僕が最後に聞こえた夕奈の言葉だった。

「はああ、はああ」

夕音は息を切らしている。

「ようやく収まった」

「あなたのせいで、ワタシはどれほど苦しむのか、ゆっくり寝るがよい……」

結局、夕奈はどこにいるか分からずじまいだった。ただ、夕奈の

声だけを聞いて、心の中の不安が収まらない。

そのとき、思いがけなく、結末が僕の前に出た。

「おねがい、やめて」

「……」

「役目を果たす前に、ワタシは止めない……」

「おねがい、これ以上おねえちゃんを苦しめないで」

夕奈のことをおねえちゃんって？ 待て、夕奈から妹がいるって聞いたおぼえがない。もしかしたら、夕奈がずっと探している人は結末のこと？

夕奈がわざわざ上京して、自分の妹を探すのか？ なるほど……それより、結末は夕奈がいる場所を分かっているのか？

「お姉さん？ 冗談じゃない？ 顔さえ似てないのに……」
夕音に言われてみると、確かに、夕奈と結末の顔はぜんぜん似てない。

どっちかにせよ、結末が夕奈とは姉妹であることを口にして、その驚愕の言葉を聞いて、僕はその場で立ちすくむ。
今すぐ聞きたいが、なかなか口を挟めなかった。

「信じないでしょ？ これを見て」

結末は首につけているペンダントを取り出して、夕音に見せる。

「普通の下弦月のペンダントじゃない？ これだけで何も示せないじゃない？ ワタシをバカにする気？」

「本当にそう思う？ 自分の首を確認してみて」

夕音は自分の首を触って、確認する。

もともとそれは夕奈の身体だから、上弦月のペンダントがつけているということを知っている僕は、その場に立って見るだけしかできなかった。

突然、思いがけないことが起こった。

二つのペンダントもキラキラと輝いている。どこからの引力を受けて、二つのペンダントが近づいている。

「なんだこれ？ 目が見えなくなる」

夕音がそっぴいなながら、手をかざした。

「お母さん、目を閉じて」

落ち着いて状況を見ているお母さんと結末は、思わず目を閉じた。「まぶしすぎる、いったい何が起こっているだろう」

僕も手をかざして、何も見えなくなる状態になった。

しばらくすると、二つのペンダントが合体して、一つになった。

真ん中にぼっかりと大きな穴が開いているのはっきり見える。

「……」

あまりにも突然のことに、僕たちは何も言えなかった。ただ、そのペンダントを見ている。ただ、一つになったペンダントを持っている結末は、何の表情も示さなかった。

「あはは」

夕音は軽蔑するように結末に向かって笑っている。

「冗談にもほどがあるわ……」

「おかしい、おかしい、このペンダントは、どう見ても普通の指輪に過ぎない」

「それで何が証明できる？」

結末はゆっくりと僕の方に向かってくる。

「ゴメン……」

「いきなり謝ってきて、何があった？」

結末が僕にすぎるような視線を見て、僕の肩にもたれかかってくる。

「ゴメンなさい」

ぼたぼた……

あついものを感じる、それは結末の涙だ。

どうして結末が泣いているか、おそらく結末自身以外に分かる人はいない。

「今のうちに言っておかないと、たぶんまた言えるチャンスがない」
ますます状況が分からなくなってきた。

「二人とも、そこで何ぼそぼそ言ってる？」

「なんでもない、なんでもない、すぐ終わるから」
僕は適当にごまかした。

「十夜ちゃん」

今度はお母さんの番だ。

「何？ お母さん」

「女の子を泣かしてはいけません！」
がくり。

大事は話だと思ったおのに。

そっちが勝手にもたれかかって泣いているのに。僕は無実だ。

今さら何を言っても信じてくれないから、せめて結末になんとかしないと。

「これで拭いて」

僕はティッシュを取り出して、結末が一枚を取って、涙を拭き拭き始める。

「もう待てない、恋愛ドラマをやるなら家でやりなさい」

夕音が鎌を持ち出して、お母さんに向かっていく。

「だめえ」

また夕奈の声だ。

「やめて、おねがい」

ますます声が大きくなる。

「もう誰にも止められない、はああっ」

夕音は痛みを耐えながら、お母さんの方に向かっていく。

「いやあああ」

「来ないで、わたしを殺さないで」

お母さんも夕音も悲鳴を上げる。

その悲鳴は学校中に響き渡った。まるで森の中で親が死んで、叫んでいる獣たちのように。

「あぶない、ぐっ」

これは一瞬のことだ。

結末が全身の力を使って、お母さんのところに飛び掛って、抱き

ついた。そして……

血の匂いがする。赤くて、生々しい血が、結末の身体からどどん噴出した。

「どう、どうして？」

「どうしてその女に飛びかかった？」

夕音がいきなり結末に質問を立てる。

「せ……せめて、とお、十夜の、お……おかあさんを、ころ……さないで」

「なんでその女を守らなければならないの？ 自分の命はどうでもいいのか？」

「わ……わたしは……どう、どうでもい……から」

「と、十夜の……さ、さいごの……しあわせを……ま、まもる」

結末は手のひらにペンダントを握ったまま、お母さんの上に倒れた。

「バカ……あなたは」

ひどい、ひどすぎる。どうして僕の幸せを奪わないといけない？

僕は何が間違ったことをした？ 殺したいなら僕を殺せばいいのに。

「さあ、次はあなたのお母さんだ」

「もう守れる人はいない、あなたが守るなら、あなたまで殺す」

殺されてもいい、お母さんが死んだら、僕も生き続けていく勇氣はない。

「ダメ、そんなことはさせない」

「ま、またあなたか？ あっ、ああああ」

何回も聞こえる夕奈の声だ。依然として居場所は分からない。

かえって、夕音が悲鳴を上げて、頭を抑えて、痛みを止めようとする。

だが、その努力はむなしく、痛みが続いている。

「ああああああ……」

「あたしが知っている十夜くんは、そう簡単に諦めると言う人では

ない」

「夕奈ちゃん……」

「本当に死にたいと思っっているのなら、殺される前に、別れよう」

「夕奈ちゃん……僕、僕……」

「十夜ちゃん」

力が失われて、僕は立てる気力もなく、地面にしゃがん。お母さんは静かにこんな情けない僕を見ていて、何も言わなかった。

一方、夕音は痛みを耐えられなそうに、地面に転がっている。

「さあ、十夜君」

「あたしの妹、ゆみが握っているペンダントを取って」

「とにかく、しゃがんでないで、立って」

「十夜ちゃん、これ」

「ああああああああああ」

夕音の叫び声はまだ止まらない。僕はそれを無視して、お母さんからペンダントをもらった。

「そして、十夜君、あなた自分のペンダントを取り出さして」

「あら、これは5年前、十夜ちゃんの誕生日プレゼントのために買ったペンダントじゃない？」

「そうか？ お母さん、もう忘れちゃった」

ど忘れした。お母さんがプレゼントとしてくれたのに、僕は忘れてたなんて、なさけない。

「うん」

夕奈が続けて言う。

「そして、あたしとゆみのペンダントが結合した新しい穴が開いているペンダントに、十夜君のペンダントで嵌めて」

僕は夕奈が言われるように、ペンダントを床において、そこで自分のペンダントを真ん中に置いた。

すると、ペンダントから眩しい光が放たれている。

「ザビシアンテンスロイン」

夕奈はまたも呪文を唱えて、そして、夕音の叫び声もなくなった。

どうやら痛みが治まったようだ。

しかし、そうではない。

夕音は気絶して、ぱたんと地面に倒れた。

今さら気づいた。夕奈は夕音の体にいるんだ。

やっと会えるけど、決して嬉しいことではない。

目の前に、夕奈が空に浮いている。

「夕奈ちゃん、どうして空に？」

「十夜君に言わないといけないことがあるの」

夕奈は真面目そうな顔で僕を見つめて、あえて笑顔を出してみせる。

とてもぎこちない笑顔だ。

その笑顔を見ると、心の中のやるせなさが消えない。久々に夕奈と出会えたのに、なぜそんな気持ちを抱いているのだろうか？

僕は夕奈を見つめる勇気をなくして、あえて目を閉じることにした。

「怖がらないで、目を開けて」

目の前に生まれたままの姿の夕奈が眩い光に包まれている。

墨染の空に純白な光に染まれ、やけに眩しい。

「あなたは？」

「十夜君が知っている、夕奈」

僕は目を擦って確かめる。

どうやら夕奈が空に浮いている事実は変わらないようだ。

「十夜君、聞いて、あたしは人間ではない」

「ウソ……」

「嘘だ」

「へえ？ 夕奈は人間ではないの？ ありえないわ」

僕もお母さんも、その話に仰天して腰を抜かした。人間じゃなかったら、どうして僕のことを好きになる？ 人間と人間以外のモノとの恋はみなののか？ そんな現実でありえないことを……

「嘘ではない、僕はただの月の精霊だ、人間に恋してはいけないの」

「月？ 精霊？ 夕奈ちゃん、何を言ってる？ 僕全然理解できない

い……」

僕は呆然と立ち尽くす。今までずっと精霊と恋していることを、信じることができない。

信じがたい。

「ねえ、夕奈ちゃん、今言ってることは全部嘘だろ？ そうだ、絶対嘘だ」

「ゴメン」

夕奈が口に出した言葉、肯定的な言葉でもなく、否定的な言葉でもなく。ただのお詫びに過ぎない。

だが、その瞬間、僕はすぐ理解した。やっぱり、夕奈は人間ではないことを、完全に理解した。

雷に当たったとしても、何の傷も無くて済んだのは不可能だ。それに、今は空に浮いていることは、普通の人間は絶対できることのないことだ。

「十夜君の側にいて、ゴメンなさい」

「十夜くんに恋して、ゴメンなさい」

「そして、十夜に愛されて、ゴメンなさい」

「あたし……あたし」

夕奈は泣きそうになって、涙が零れそうな顔で僕を見ている。

「もついい……」

「そんなのどうでもいい……」

「たとえ夕奈が人間でも、精霊でも……」

「僕は夕奈ちゃんのことを好きだという気持ちは変わらないんだ！」

僕は再び夕奈の前に告白した。今まで夕奈への気持ちを夕奈の前に吐き出した。

「あらあら、十夜ちゃんはずいぶん成長したわ、お母さん嬉しい」
「……」

僕は雰囲気壊すお母さんが言っていることを無視して、決意のまなざしで夕奈を見ている。

「……」

「うれしい、あたしはうれしい」

「でも、話だけで何も変わらない……」

「僕は十夜君の側にいればいるほど、傷が深くなっていくだけだ、あたしは……」

「あたしが十夜君の側にいると、十夜君の周りの人を傷つける」

「あたしは、のろいを掛けられているから」

夕奈が次から次へと口に出した爆弾発言が、心が何千万本の針にちくちくと刺されて、痛んでいる。

「もういい、これ以上言わないで」

「だめだ、これ以上言わないと、もう言えるチャンスがない」

「十夜ちゃん……」

お母さんは相変わらず何も言わずに、同情する目で僕を見ている。神さま、僕は一体何かいけないことをして、こんな酷い目に遭わせないといけない？ 大切な友達を失い、普通の恋をしようとしただけなのに、周りの人が僕のせいで傷ついたなんて。そんなことはもういやだ。

僕が幸せになると、周りの人が傷つくってもういやだ。

「十夜君……あたしね、やっと気がついた」

「あたしがずっと探している人は、十夜君のことだ」

「……」

僕を探すために、どこかの田舎から一人で旅立って、ここまで来た夕奈は、一体何のために来ただろう？

その意図を明白にするために、僕は夕奈に聞く。

「どうして僕のことを探さないといけない？ 僕はべつにイケメンでもないし、背も高くないし……」

「こら、自分のことを貶さないの！」

頭のとっぺんから痛みを感じる。

「あいてっ」

静かにずっと見ているお母さんは、僕の発言に対する反応に違い

ない。

「そんなのあたしは気にしてない、十夜君がここにいるなら、それでいい」

「……」

突然、夕奈の目に包まれている光が強くなり、色もそれにしたがって、純白から蛍光フロレッセントに変わった。そして、夕奈の身体から、両側に羽根を広げ、ぱたぱたと扇ぐ。

「見たのとおり、あたしは精霊だ」

目の前の光景を見て、信じたくなくても信じざるを得ない事実だ。

「これがあたしのもともとの姿だった」

「ただ、のろいにかけて、人間になったの」

「……」

背中に羽を生えて飛んでいる夕奈は要らないから、普通で可愛い夕奈だけでいい。

「どうして今は元の姿に戻った？ 僕はさっぱり分からない」

もうだめだ、精神崩壊する間際だ。早く終わらせてくれ……

「この姿に戻すために、十夜君がつけているペンダントと、十夜君からあたしへの『あい』が必要だ」

「僕のペンダント、そして僕の『あい』？ 何言ってるの？ そんなの関係あるわけじゃないか」

「いや、あたしと結末のペンダントと、十夜君のペンダントを結合させるために、十夜君からの『あい』で浄化されないといけないの？ そうしないと、ペンダントが結合できないの」

「そ、そんな……」

あまりにも滑稽な話を聞かされて、頭がずきずきする。

僕の『あい』をもらうために、ここに来て、僕のまわりの人を傷つくなか。

「でも、のろいをかけられているあたしは、もともと他人のことを好きになることが許されない……」

「でも、そうしないと、のろいが永遠に解けない」

のろいを解けるために、僕からの『あい』が必要なのに、僕のことを好きになると、僕のまわりの人が傷つく。なにこれ？ こんな漫画でも出ない話が僕にふりかかるなんて。僕は信じない、絶対信じない。

「ははあっ、あはは、はははあっ」

「十夜ちゃん、ゴメンなさい……」

僕は狂った。まるで太陽が西から昇るように。

世界も狂っている。僕も狂っている。そして……すべてが狂っている。

僕は精神の病にかかった精神障害者のように、甲高い声で笑っている。

「いい加減にしなさい」

後脳部が強く叩かれたことで、僕の意識が戻った。

「お母さん……どうして」

「夕奈のことが好きという気持ちは変わらないと言ったのに、今さら狂ったってどうするのよ？ 自分が言ったことはもう全部忘れた？ もう夕奈のことはどうでもいいのか？ 十夜ちゃん、いつの間にか、こんな意気地なしになったのよ、わたし……悲しいよ……」

僕は意識した。夕奈のことが好きだ。のろいをかけられても、精霊である存在でも、その気持ちはどうしても変わらない。

「わたしのことはいいから、さあ、行きなさい」

僕はゆっくりと夕奈のところへ行く。そして、また告白した。

「夕奈ちゃん、愛してる」

今の僕は、それしか言えない、他の言葉は何も思いつかない。おそらく、夕奈の心を動かせる言葉は、これ以外はないと思う。

「……」

「ゴメン」

夕奈が口から発した言葉は、僕が望んでいる言葉じゃなかった。

「今のあたしは、十夜君の気持ちを受け入れられないの……」

「あたしはもう人間ではないから、人間と恋することはできないの

……」

そんなくだらない理由で恋することができないから、いつそ最初から恋しなかつたらよかつた。それはただの言い訳だ。逃げ道を作るための言い訳に過ぎない。

「僕は認めない、そんなの認められない!!」

「人間じゃないから恋ができないって、身勝手なことを言うんじゃない」

「あ、あたしはそういうつもりじゃ……」

「そういう気持ちじゃなかつたら、行くな、どこにも行くな!」

蛍光色の羽根がすでに夕奈が思うように扇げなくて、夕奈の身体がだんだんと落下している。まるで翼が折れた天使のように、扇いでも、扇いでも、飛べない。

僕は思わず前に行つて、夕奈を抱きしめた。

「十夜君、ダメ……」

「離して、抱きしめないで」

夕奈は僕を突き放そうとする。

「放さない、絶対放さない……」

二度と離すもんか!

せつかく戻したのに、手を放したら、また失うかもしれない。チャンスはちゃんと自分の手でつかめないと、失ったら誰にも文句を言えない。

「十夜君、あなたはエゴイストだね」

「……お互い様だ」

「えい、やつ!」

力が失ったはずの夕奈の羽根が、強く扇いで、僕を弾きだした。

「グアニゾエ」

「か、身体が動けない……」

どうやら夕奈が僕に呪文を唱えたようだ。そして、僕の身動きが封じられる。

「十夜ちゃん……」

「お母さん、助けて」

僕はお母さんに助けを求める。だが、人間である僕たちは精霊に勝てない。

「心配しないで、十夜君、この呪文は自動的に解除されるから」

「卑怯だ、早く解けて、卑怯者、エゴイスト！ そんな夕奈ちゃん
が嫌いだ！」

「！！！」

お母さんは僕の言動にあっけにとられた。でも、ちよっかいを出さなかった。

「はい、あ、あたしはエゴイストです」

「そんなわがままなあたしを、許してくれませんか？」

熱い雫を感じる。

夕奈の涙だ、夕奈が泣いている。

僕たちの恋が実らなかつたから泣いているだろうか？ それとも、良心を咎めて泣いているだろうか？

そんな夕奈を見て、僕も自然に泣けてくる。

「そんなわがままなあたしを、許してくれませんか？」

夕奈は2度と僕に問いかけてくる。答えが出なかつたら気がすまないように。

気づかないうちに、呪文が解けた。

「僕、夕奈ちゃんのことを許さ……んんっ」

不意打ちを喰らった。

夕奈が突然目を閉じて、こっちを向けてきた。

そして、僕の口を塞ぐ。

瞬時の出来事で、僕はすべてが分かった。

これが、夕奈が、僕への、最後口付けをかわした……

だが、この口付けは、決して甘いのではなく、夕奈の涙を滲ませ
て、ほろ苦くて、切ないキスだ。

「ゴメンなさい」

「そして、さようなら……」

「夕奈……夕奈が消えていく、どうして？」

お母さんの言葉に驚かされて、僕は目を開けて確かめる。

目の前の夕奈の姿は、その存在感が次第に薄くなっていく。

僕は夕奈の頬を触れる、女の子のそのすべすべとした肌触りはもうない。確実に夕奈の頬を触っているのに、その感触は髪を触っている、ざらざらとしたように、妙にいやな感じがする。

「短い時間ですけど、こんなあたしと付き合ってくれて、ありがとう」

「行かないで……」

「もうダメです、あたしの身体がだんだん消えていくから」

僕はできるだけ夕奈を引き止めようとするが、夕奈はちっとも妥協しない。

「十夜君、最後に、お願いがあるの」

「夕奈ちゃんのためなら、何でもする」

僕まるで奴隷はマスターから解放されたいと懇願しているような視線で夕奈を見ている。

それは、夕奈からの最初の、そして、最後の願い事だ。

「あたしが逝く前に、あたしのために、泣いてくれますか？」

「泣く？」

「うん、泣いて、くれますか？」

……
……

ダメだ、涙は、まるで水分が完全に吸われて干乾びたように、涙腺から何も出なかった。

「やっぱり、ダメですか？」

「ゴメンなさい……ゴメンなさい……ゴメンなさい」

再び自分の無力さを痛恨する。一つの感情が奪われたって、どんなに悲しいことか。

泣きたくても泣けない。そういう切ない気持ちをなんとかでも味わったのに、今回だけは特別に切ない。

やるせない、その次もやるせない。

無数のやるせないさは、ただ立て続けに僕の内心を侵蝕して、心を蝕んでいく。

「あなたの彼女がそろそろ逝くんですよ、それでも、泣いてくれな
いの？」

「ゴメンなさい、僕、僕は……」

目がかすかになっている、視界がぼやけている。

「行かないで」

最後のあがき。たとえ何もできないと分かっているながらも、僕はただ夕奈に懇願する。だが、夕奈は頷いてくれなかった。

そして、夕奈の体が次第にぼやいている。

「もう時間だ……あたしは、もう行かないといけないの」

「あたしはもともとこの世界に存在しないものだから」

「こんなあたしを好きになって、愛してくれて、ありがとう」

ありがとう……

そして、さようなら……

眠る大地に、風がそよぐ。

目の前の女の子が、姿が消され、一つの翡翠となり、ゆっくりと僕の手に落ちる。

それが、結末の下弦月のペンダントと夕奈の上弦月のペンダントと僕の月型のペンダントがあわせて作られた、新しい翡翠だ。

「うそ……」

「夕奈ちゃんが消えた、うそだろ……」

僕は翡翠を胸にしまう。

「夕奈ちゃん、夕奈ちゃん」

「夕奈ちゃあああああああ……」

その叫び声は、町中に拡散していく。

「あれ？ どうして？」

僕は目を擦ってみる。湿気を感じられる。僕は泣いている。

これは、間違いなく、僕が生まれて初めての、他人のために流れた涙だ。

完璧な涙が、流れた。

ぼたぼた……

目頭が熱くなって、堰を切って涙がどんどん流れ始めた。僕は確実に泣いている。

お母さんは切なさうに、側にずっと僕のことを見ている。

「と、十夜ちゃん……」

「お、お母さん」

「僕、僕は失恋した……」

「うわああああ」

お母さんはそつと僕の頭を撫でる。

「ねえ、十夜ちゃん」

「人間は、生きているうちに、必ずたくさんのもので得られます。ですが、そのうちに、きつと失われるものがあります」

「お父さんと離婚したとき、わたしも毎日涙で顔洗うような日々を過ごしていくの、ですが……」

「たとえお父さんを失っても、わたしには、息子のあなた、十夜ちゃんはまだわたしの側にいるから、だから」

「だから、泣かないで、夕奈を失っても、わたしもずっと十夜ちゃんそばにいますから」

さらに涙が止まらなくなる。今まで夕奈と一緒にいた時間を思い出したら、なま暖かい涙はまた頬を伝って、翡翠を濡らした。

「お母さん………うわあああああ」

夜明け前、僕はずっとお母さんの胸に泣いていた。

何年間も泣いてないのに、この日に、その何年間も溜まっていた涙を、全部流れたような気がする。

一つの感情は、もはや取り戻した。

エピソード

「行ってくる」

「気をつけてね」

あっという間に、もう半年過ぎていた。

集中治療室にずっと眠っている浩平は、既に起きて、今はリハビリ中。大切な恋人が失った傷は、大切な友達が癒してくれる。

今日は、いつものように浩平の見舞いに行く。

「おはよう」

「よっす」

「身体の調子はどう？」

「イマイチだ、歩くのも大変だぜ」

確かに、病床の隣に、松葉杖が置いてある。きつと歩行の助けとして使っているだろう。

「今日は特別として、僕はおまえの松葉杖になる」

「マジか？ いえい、レッツゴー」

「って、どこ行くつもり」

「もちろん綺麗な白衣の天使さんがいっぱい集まってる場所だぜ」

僕は思わず浩平の頭を叩く。

「いてっ、なにすんだよ、おまえ」

「ナースがいっぱい集まってる場所なら、ここじゃないのか？ 寝

起きが悪いのか？ おまえ」

「わりい……わりい……どこに連れて行ってもらってもいいから、

とにかく、このくせーなにおいがマジ勘弁してくれよ」

「けが人のくせに、けちをつけるな」
「へいへい」

浩平はしぶしぶと答える。

「とりあえず、行こうか」
「ういっす」

僕は浩平の身体を支えながら、ゆっくりと歩いていく。部屋を出る際に、お母さんとばったり会った。

「あらあら、十夜ちゃんじゃない？」

「おはよう、お母さん」

「よっす、おばさん」

「おはよう、浩平くん」

「おばさん、今日も綺麗だね」

「あらあら、もう」

相変わらず、口だけが甘い。

「今日のパン……ぐわっ」

僕は浩平に鳩尾を強打した。

「あああつ、おま、え……ひどい……けが人にやさしくしてくんな
いのか」

「ゴメン、力を入れすぎた、というか」

「ナンパしてもちゃんと対象を選べよ」

「すまん……」

「お母さん、いきなりこっちに着て、僕を探そうとした？」

「うん、長い時間お墓参りに行ってないから、一緒に行こうかなと
思ったの」

「いいよ、じゃ、今行こう」

「おい、俺のことはどうするんだ？」

「けが人だから、おとなしく寝ろ」

「くすくす」

お母さんは浩平を見て笑っている。

「ち、ちくしょう」

浩平専用の松葉杖役をやらなくて、お母さんと一緒にお墓参りに行った。

結末は夕奈が消えた日に、僕のお母さんを身代わりになって、夕音の攻撃を受け止めて倒れて死んだ。そもそも結末は夕奈と違って、歴とした人間だから、夕奈のように、雷に当たっても傷つかないモノではない。

その日に、夕奈が消えた同時に、夕音も消えた。それは、おそらく誰にも分からないことだと思う。夕音は一体何者か、誰にも分からない。なぜ夕奈は取り憑かれるか、誰も知らない。

僕たちは結末の墓の前に立っている。

今でもすごく後悔している。なぜ結末がいきなりこっちに謝ってくるか、もう分かった。だが、謝ったのに、かえって殺されて、これだけを思うと、涙がどんどんあふれて来た。

「ゴメンなさい……ゴメンなさい……僕のせいで」

僕は頭を地面に叩く。だが、起こった事実が変わらないと分かっている。僕は頭を叩くのをやめなかった。

「もういいの、いいの、十夜ちゃん」

「十夜ちゃんのせいじゃないの」

「自分に責任を押し付けられないで……」

「でも……」

僕は夕奈のことを好きにならなかったら……

僕は夕奈と出会わなかったら……

一人の命を犠牲にしてもう一人の命を救うのは、いやだ。

あの日、僕たちは出会わなければ、今も笑えるのだろう。せめて、夕音が現れなくて済んだ、結末も殺されなかった。

結局、誰も幸せになっていなかった。

「でもなんかじゃない、もう自分のことを咎めないで……」

「誰も望んでいないことが起こったからには、今さら目の前のものをもっと大切にしないといけないの」

「目の前のものをもっと大切にしないと、失ったらきつと後悔する

「よ
「ほら、ちゃんと結末に挨拶して」
「うん……」

お母さんが言った言葉を反芻する。僕は本当に夕奈のことを大切にしているのか？

愛し合う二人をどうやって相手を大切にする？ 真心を込めて相手を愛する？ お互いの身体を求めて愛し合う？ 大切にする方法は一体なんなのか？ 人によって違うだろう。
それより、一番大切なのは……

僕はここにいる事……

お母さんはここにいる事……

浩平が無事に生きている事……

そして、夕奈、結末がいた事……

かつて僕と夕奈は愛し合った事……

僕は大空を見る。

水色の空に、どことなく夕奈の顔が浮かぶ。

「夕奈ちゃん……」

「たとえこの世に居なくても、あなたはずっと僕の心の中にいる……」

「あなたの微笑みを忘れない、絶対忘れない……」

いつか、どこかでまた夕奈と会えること……その日を待っている。

「はい、これ」

僕はお母さんから花束をもらって、結末の墓の前に置く。

そして、その隣に、僕の翡翠を置いた。

「結末ちゃん、ここでゆっくり、安らかにお眠りなさい……」
僕が最後に言った言葉だった。

「十夜ちゃん、どうして？」

「辛い思いを抱えながら行き続けるより、僕はその辛さをどっかに置いておきたい」

必ずここに帰ってきて、翡翠を取り戻すから。

それはいつか分からない。

帰る前に、僕はもう一度夕奈の墓を振り向いた。不意に涙が零れ落ちた。

流れない涙は、また頬を伝って流れていた。

第5話（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

流れない涙

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0013d/>

流れない涙

2009年3月24日08時45分発行